



江戸名所圖會卷之二

天旋之部目録

東海寺 約玄室  
 新敷山 約玄室  
 光嚴寺 約玄室  
 貴弘明神社 約玄室  
 天龍寺 約玄室  
 海晏寺 約玄室  
 上古海道 約玄室  
 西光寺 約玄室

長徳寺 約玄室  
 寄木明神社 約玄室  
 海龍寺 約玄室  
 米福寺 約玄室  
 光福寺 約玄室

磯の清水 約玄室  
 中の橋 約玄室  
 本光寺 約玄室  
 常行三昧寺 約玄室  
 品川寺 約玄室

大龍寺 約玄室  
 妙國寺 約玄室  
 千祥院神堂 約玄室  
 納経塚 約玄室  
 麻島明神 約玄室

品川驛 約玄室  
 洲邊辨財天 約玄室

昭和九年  
七月六日  
辨末

冷森八幡宮  
笠島  
磯引松  
荒瀧  
戸越八幡宮  
女塚

遺懸松  
八景坂  
行慶寺  
蓮華寺  
女塚

木東山  
桃雲寺  
蓮華寺  
女塚

長榮山  
本門寺  
蓮華寺  
女塚

馬込八幡宮  
梶原氏宅地  
鳳来寺峰の薬師堂

鴉木村光明寺  
觀音堂  
光明寺の池  
十騎社  
高畑村光明寺

矢口村新田明神社  
觀音堂  
高畑村光明寺

古川薬師堂  
觀音堂  
高畑村光明寺

大森  
觀音堂  
高畑村光明寺

行方弾正忠明連宅地  
圓頓寺  
蒲田八幡宮

妙安寺  
長照寺  
六郷八幡宮

六郷渡  
羽田舟又天社  
河邊  
河邊高宮宅地

堀内山王宮  
河邊系桃林  
尾除大師堂  
鹽濱

池上氏所藏蜂龍蓋  
成院  
河邊権現社

石觀音堂  
河邊新田神社  
同居住旧址  
姥ヶ森

直躬丸湯射早勝塚  
成院  
河邊権現社

粟生丸湯射忠良塚  
宗參寺  
養光寺

依々木明神社  
勝福寺旧址  
市場觀音堂  
鶴見川  
鶴見橋

末吉不動堂  
秋田城介義景旧館地  
松隱寺  
成願寺  
慈眼堂

白旗八幡宮  
子安觀音堂  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

義高入道墓  
觀福壽寺  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

浦島塚  
浦島塚  
神奈川驛  
能満院

宗興寺  
雲松院  
折本淡島明神社  
本覺寺切通  
版綱権現社  
姥島  
帷子里  
太神宮  
蔣田城跡  
青木明神社  
神明宮  
金澤 同熱  
金澤 同熱  
金沢貞顯墓  
普賢表 文殊標

觀音山  
小机城跡  
本覺禪寺  
袖ヶ浦  
本牧十二天宮  
帷子川  
品野坂 一名権左坂  
乘蓮寺  
くさくさ寺 天満宮  
杉田梅園  
徳見堂  
美女石 一室  
河原院

兼好法師閑居舊址  
天然寺  
野島 土人百軒島  
瀬戸  
瀬戸明神社  
金龍院 九龍亭跡  
上行寺 母上人石塔  
当光寺  
界地藏  
雀ヶ浦 一名天  
夏島

慶雲寺  
師忌徳権現宮  
西向寺  
道灌山  
洲乾無姓天祠  
杉山神社  
作戸川  
界本 地蔵堂  
任吉明神社  
稱名寺 徳梅 今法顯時墓  
西向院 二王門  
徳世祠 二王門  
二位禪尼經堂  
古町街道  
程ヶ谷杉町  
吾妻の神社 天徳  
富士法間祠  
陽光院  
多目周防宅地  
泉谷寺  
徳権現山 古戦場

金澤文庫舊址  
藥王寺  
浦の郷  
野島の渡  
照天松  
圓通寺 神宮  
徳仁寺舊跡  
六浦川  
光傳寺  
菅根権現社  
烏帽子島  
名産甲香

藥師堂  
善應寺  
洲崎  
瀬戸明神社 徳梅  
金龍院 九龍亭跡  
上行寺 母上人石塔  
当光寺  
界地藏  
雀ヶ浦 一名天  
夏島

兼好法師閑居舊址  
天然寺  
野島 土人百軒島  
瀬戸  
瀬戸明神社  
金龍院 九龍亭跡  
上行寺 母上人石塔  
当光寺  
界地藏  
雀ヶ浦 一名天  
夏島

慶雲寺  
師忌徳権現宮  
西向寺  
道灌山  
洲乾無姓天祠  
杉山神社  
作戸川  
界本 地蔵堂  
任吉明神社  
稱名寺 徳梅 今法顯時墓  
西向院 二王門  
徳世祠 二王門  
二位禪尼經堂  
古町街道  
程ヶ谷杉町  
吾妻の神社 天徳  
富士法間祠  
陽光院  
多目周防宅地  
泉谷寺  
徳権現山 古戦場

萬松山東海禪寺 呂川北馬場あり花浴大徳寺派の禪宗

江戸觸頭の一員あり當寺ハ輪番中あり年々八月あり交代あり

寛永十五年戊寅 台命を奉あり澤庵和尚開創あり

所の禪園あり塔頭十七

佛殿 釋尊の像を安あり額 祈禱堂 天倫筆 二重家根額

世尊寺殿 同筆 山門樓上あり觀音を安あり額 潮音閣 大明院宮

公辨法親王真跡 中門額 東海禪寺 天倫筆

鐘樓 本堂の右あり要津橋 南の方あり千歳杉 同所橋あり

門あり後道の右あり寛永の頃 大樹命あり千歳杉あり是あり浴鳳池

十境の一あり宝香の噴霧風あり吹折あり今ハ其幹あり池あり北あり汀あり是あり大樹あり寛永

於文の庭の泉水あり十境の一あり寺後 釣玄室 池あり北あり汀あり是あり大樹あり寛永

山下清泉流出あり引あり之あり同一池あり於室あり之北あり面あり云あり東海和尚年賦あり云あり寛永二十年あり仲秋あり之夕あり

此所あり法あり同ありありあり則あり十境あり之一あり東海和尚年賦あり云あり寛永二十年あり仲秋あり之夕あり

台駕入東海あり既あり月あり於山亭あり台顔あり怡あり而出あり山亭あり猶あり來あり月あり明あり倚あり池あり上あり小亭あり亦あり侍あり傍あり云あり

泰龍井 鉤あり玄室ありの東あり並あり寛永ありの頃 大樹あり池あり茶ありの池あり萬年石 池あり中あり東ありの方あり

一あり其時あり遠州あり侯あり小堀あり政あり一あり命ありせありれありくありよありせありらありるあり所ありなり

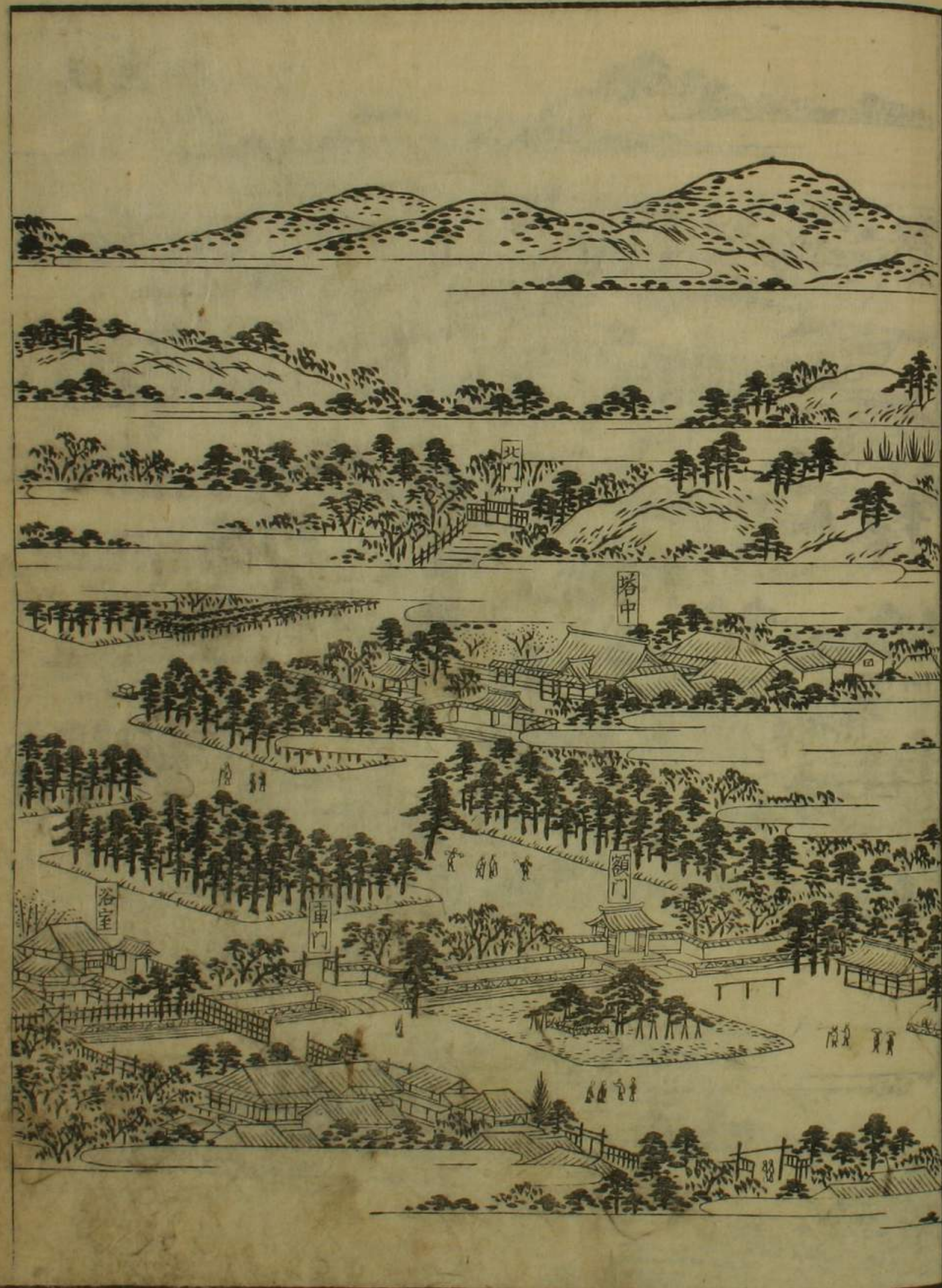
午頭天王社  
東海禪寺



法寶堂

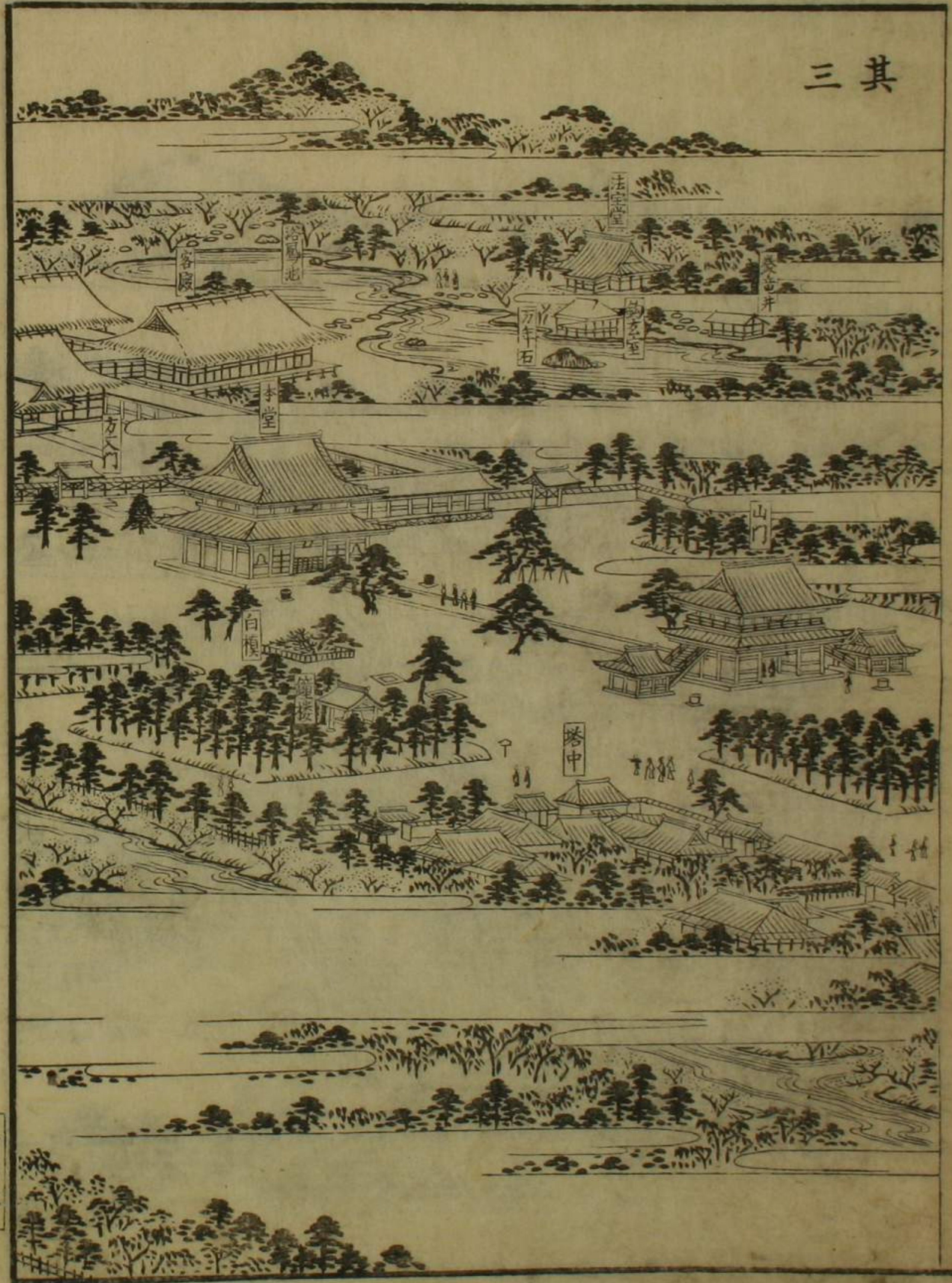
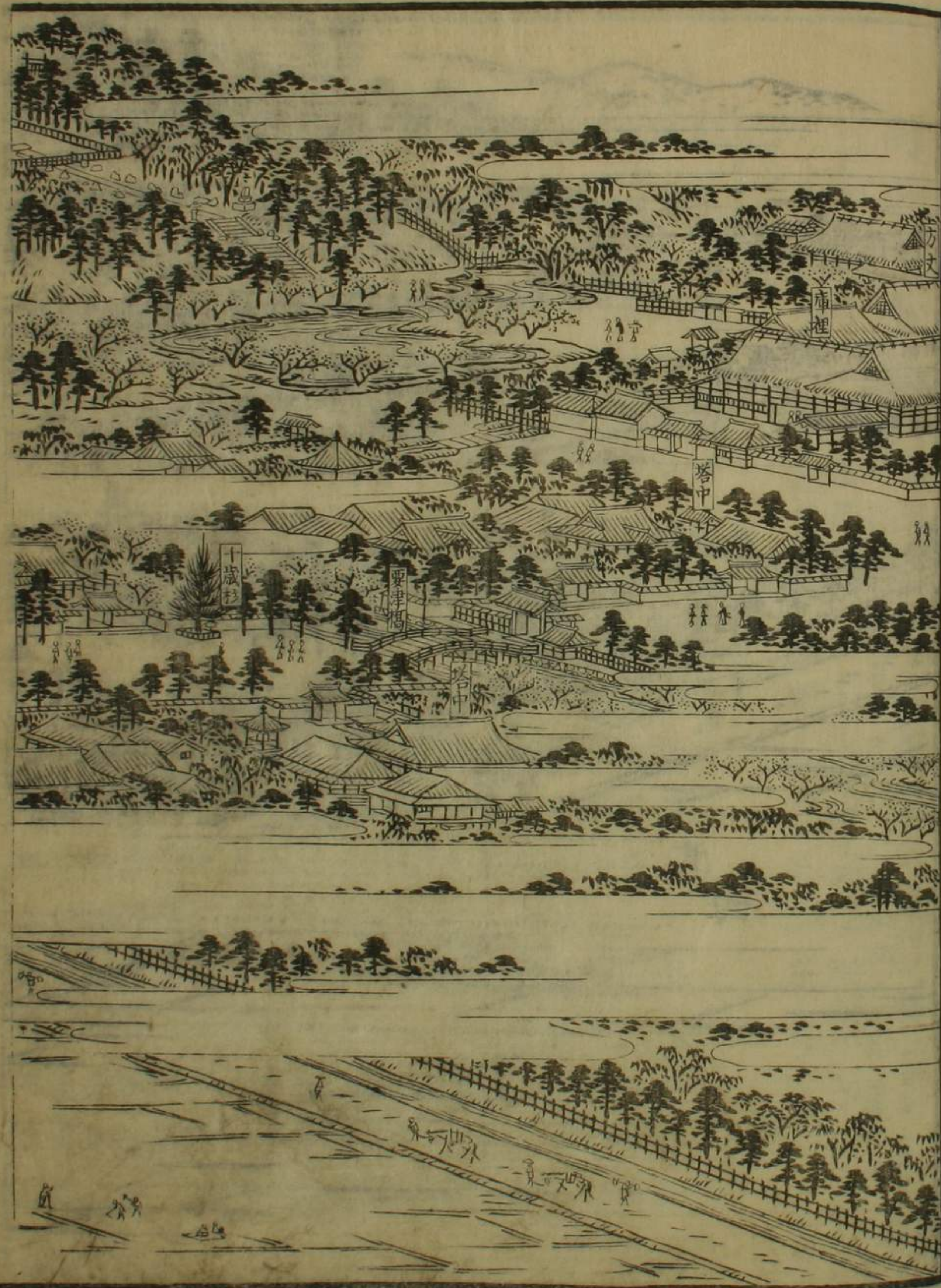
加書茂院競馬南都焚木能其餘人物花鳥の類なり  
あり切當十境の其一なり  
の杉の壁上の再ハ特野の探幽の筆なり

以鈞其則以千千且下君旨酌名極貴裡之翁石左萬  
春命幾累此始而發況下政相各也偏痴朽之熟相年  
迎如萬華無十限光於佳一半以似得兀骨石見府石  
驚世頂窮則凡而石言即也所守恬而乎乎之見之記  
豈矣萬為窮數陟乎曰起時思靜淡合或或無移記  
可村八石萬者變鳴不向小聞篤虛德於由奇  
輕語十之以始改呼疑石堀焉也無容免醒形今  
以文壽萬一其石是三遠於之是之兮性台茲  
和銘猶量筭而觀乎萬呼江此趣世白李狀座寬  
氣曰在以則窮益哉年萬守諸相而之顯惠不於永  
住一麓石不十為石石年政子君有求乎祐端此癸  
山團者之知始萬乎也石一雖命谷奇共之險池未  
老無重耶壽幾十之哉大石侍有侍神者不石拱沼三  
衲盡於以量十而言入度三茶所臣不未然乎立下月  
澤藏九世此百窮也于之点爐思曰死曾唯皆若池十  
庵鼎計千百未一頭下非此之知突不由有四  
宗以萬則萬始必言矣無石體此兀然醉島日  
彭秋年復君億百可台以所不知石而彼兮島偶  
敬送石不壽兆則以覽定君懼可至之在防粟有  
書復知山年窮十一天有斟無虛所草風里幽



其二

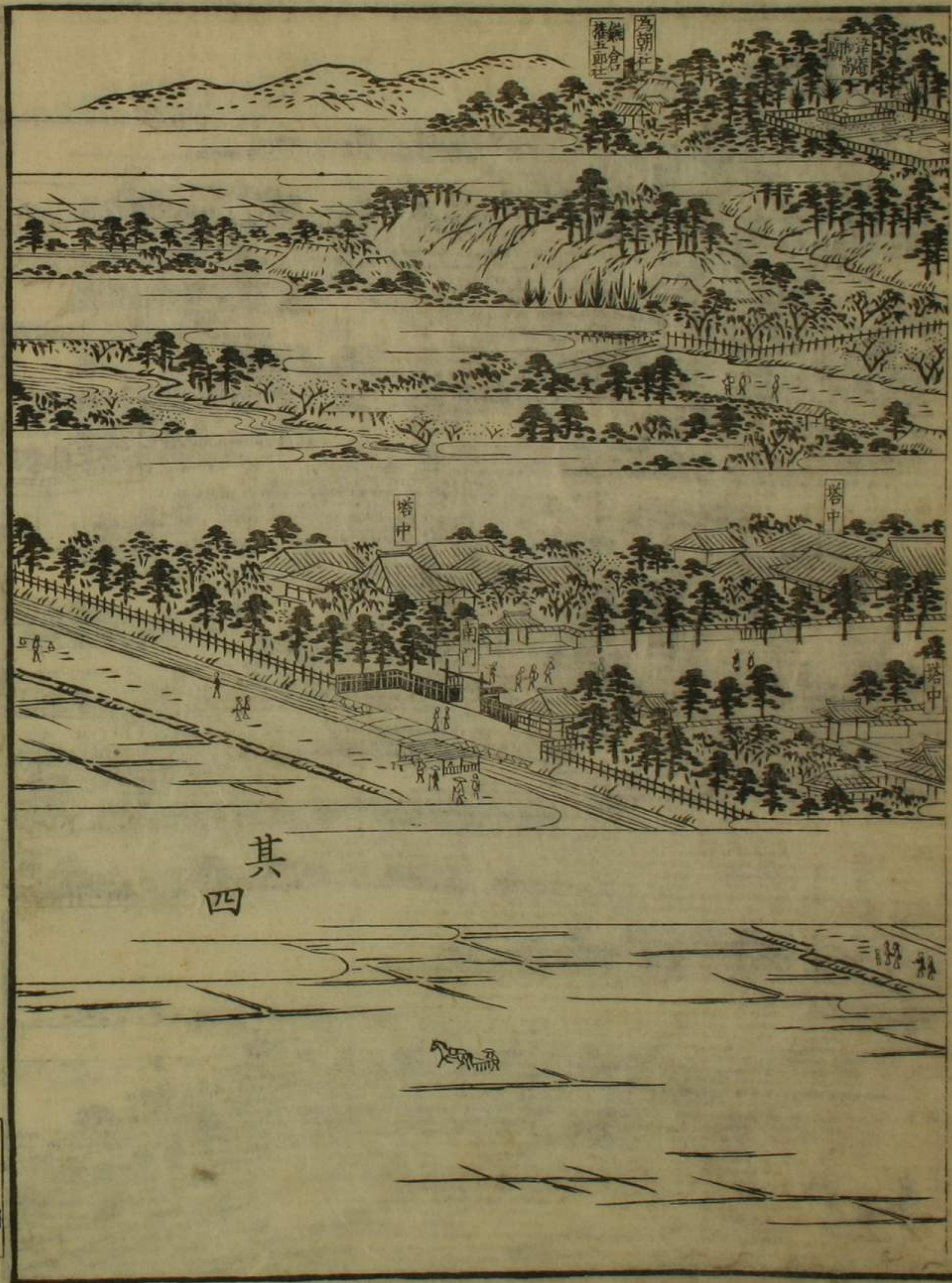






開山澤庵和尚正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 昔者南浦明和尚正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 時虛堂本朝而餘人啟迪其作法者入以十有五  
 老印歸于一師而後閱二燈之相續明起法幢今  
 正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 其大燈師明而後閱二燈之相續明起法幢今  
 禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 也氏諱典德寺大國師朝派  
 氏諱典德寺大國師朝派  
 諱典德寺大國師朝派  
 典德寺大國師朝派  
 德寺大國師朝派  
 寺大國師朝派  
 大國師朝派  
 國師朝派  
 師朝派  
 朝派  
 派

開山澤庵和尚正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 昔者南浦明和尚正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 時虛堂本朝而餘人啟迪其作法者入以十有五  
 老印歸于一師而後閱二燈之相續明起法幢今  
 正印室大禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 其大燈師明而後閱二燈之相續明起法幢今  
 禪無耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 耀挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 挑也氏諱典德寺大國師朝派  
 也氏諱典德寺大國師朝派  
 氏諱典德寺大國師朝派  
 諱典德寺大國師朝派  
 典德寺大國師朝派  
 德寺大國師朝派  
 寺大國師朝派  
 大國師朝派  
 國師朝派  
 師朝派  
 朝派  
 派



其四

弟會身月月号受疾加寺復之入寺慕黑号河大問卓鈞然飢下生  
子也於十不而道預一其舊筆山曰下不無 上法庵命師色扁涯  
武門東一痊煩俗知點可規固草東於日國 皇婁曰召知寬投爾  
野人海日一 予緣墨知之識木海金而師皇召曉檢還其永淵後  
氏在之也日 賻盡書也 新生落城下号情入遇東二行己軒歸  
安泉西世曉朝衆遺于正 筑輝成南謚也大 優暫翁止已折山  
齋南北壽天奏僧誠贊保鈞之師之品天願悅 涯寓師係師脚陰  
翁者岡七接莫著云詞乙命久奉日川應下師仙耐止抵數有鑑之  
往祥唯十筆入衣瘞於酉益昌 賦創大 奏院望焉武不事肉故  
年雲種有書木喫全其夏是辛 賀草現綸我講愈 陵寔昇煮里  
昇樹松三邊牌飯身上令依已鈞頌梵國旨山原高 於容玉麻構  
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刹師 第人戊幕城色室麥一  
行名其臘字本平後為師之降賦釐使有 二論寅下外壬翁粟把  
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同豆茆  
求寂不十然之矣莫空一願本歌厥住于皇徹瀾師師村 貶給於  
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一 于日宗  
其曩塔九逝堂莫經年相有出首 山祖之唯起京營牛幕窮食鏡  
塔背蓋瘞實云為設仲相功世祈 曰若圭有如師中鳴下卿而主  
因參依于十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸 時之降遐無山  
循學遺全二彌謚莫示親本法基與松也寶師江 時地 微有之

勝深塵邑在寅禪峰延驪綽寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之  
繁靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典  
抱有視南門造問其為如古二板師春室護子能平匠所鏡之就籍  
烟時聲再菴大道去開見人年着昔聞師同麼殺素寫契移機明附  
霞寓色建乙仙詰雷山點風而繼衆師之色于佛作鏡悟同辨堂師  
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失者略壽投色縱古初  
痼京泡宗南拾馳其也同七院德春辨對宗笑快入像印南橫鏡雲  
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂魔索證宗應禪英  
時芳有巫罹軒謝重餽有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉  
僑林時不鬱師之陽法宗還寺年慶異而為不突而鏡弓師如一公  
城菴在徐依禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉日執響凍玉  
州鞞泉尋之坐丑履慶者于德八丁護轉考起云降毫澤侍實滴甫  
薪光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父魔書菴中透公琮  
之匿天舊師暇新信讚建南香主師真回緇平攘宋曰賦瓶網住公  
妙耀下觀告緇南尹之一泉為龍年跨也侶天羊活鹿祇日金邑以  
勝有邑師邑大宗公于菴南古興三竈此殊下隱機面夜夜鱗之法  
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器  
守入愛名相年鐘夕南日素供南有也鏡圓領底由描其究頌春期  
空泊幽利依譜樓入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師  
寂瀨遂若於狀甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師招

未果亦茲賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 於亦然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 虛子正孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 經十室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 師播四其海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 道矩規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 一圓相疊中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 淵才明泉湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 語而明矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 橫機峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 姑射山峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 塔寂然裡峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 無寂然裡峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 天無寂然裡峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 右覆載來然裡峻矣湧中規海室世孫汎然故賣之不揣已講習道義於乃師者莫若余也  
 大興國南雲  
 寶曆三年癸酉冬十二月十一日  
 山東海禪寺慈蔭塔下二月十一日  
 寶曆三年癸酉冬十二月十一日  
 山東海禪寺慈蔭塔下二月十一日  
 寶曆三年癸酉冬十二月十一日  
 山東海禪寺慈蔭塔下二月十一日

泉讚開山澤庵和尚影像一幅  
 南語の南宗精舎に蔵せり讚ふに云く  
 正保二年酉師歳七十三畫工の命  
 相と作りし親ら一筆を其中に  
 軸一ハ則當寺に置一ハ則

無名一子告予曰選得日和尚之真展見則一圓相也  
 野重錄九點十即書曰選得日和尚之真展見則一圓相也  
 坐其此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 家似豆此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 麥籬此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 修籬此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 些王法方薩此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 彌勤不募身全埋列鳳宿此圓相包作女蛙人拜趙壁元無瑕劃一圓相也  
 杜多却增聲前來體顯諸阿人難見羅漢雲霞太列無相如秦  
 呼衣蒲童子課湯阿迦世王難見羅漢雲霞太列無相如秦  
 鉢下童子課湯阿迦世王難見羅漢雲霞太列無相如秦  
 添我氣請看聲聞侍我菓不窺維摩起誦急引不尊文殊來頻  
 爹我氣請看聲聞侍我菓不窺維摩起誦急引不尊文殊來頻  
 生我氣請看聲聞侍我菓不窺維摩起誦急引不尊文殊來頻  
 萬般野喜奈勢縛羅我菓不窺維摩起誦急引不尊文殊來頻  
 所捨無已野喜奈勢縛羅我菓不窺維摩起誦急引不尊文殊來頻  
 前絕等嫌底藥病相任違順邪境只莫然快取無好底法從  
 將來空裡乙花中若者落遠邪境只莫然快取無好底法從  
 正保二年五月七日東海比立某老齡七十三

海  
 天  
 下  
 東  
 海  
 比  
 立  
 某  
 老  
 齡  
 七  
 十  
 三

少林院  
林泉  
縣居大人  
墓  
南郭先生  
墓



縣居大人墓 塔中少林院の後山あり 當院過去帳に玄珠院真淵親龍居士  
とあり 明和六年己丑十月晦日歳七十三や七身ヲうり 後并壹  
卷よ詳

南郭先生之墓 同 柳塔あり一家の墳墓並び建り 先生姓ハ服部氏講ハ  
島七黨の一わし 曾祖父某越中國高島は 徒の父の諱と元相といふ京師に移る

母ハ山本氏なり 天和三年癸亥生る 歳十四 江戸より來り 祖徠先生小業と受後三年  
柳澤侯に仕入 後十八年致仕 宝曆九年己卯夏六月廿一日卒 高元碩謹書とあり

墓碑の銘文ハ 小畧を其碑陰に後四位下侍從源頼順撰 臣高元碩謹書とあり  
鎌倉權五郎景政靈祠 同所春雨庵の後の山にあり 津由知へり 此菴ハ

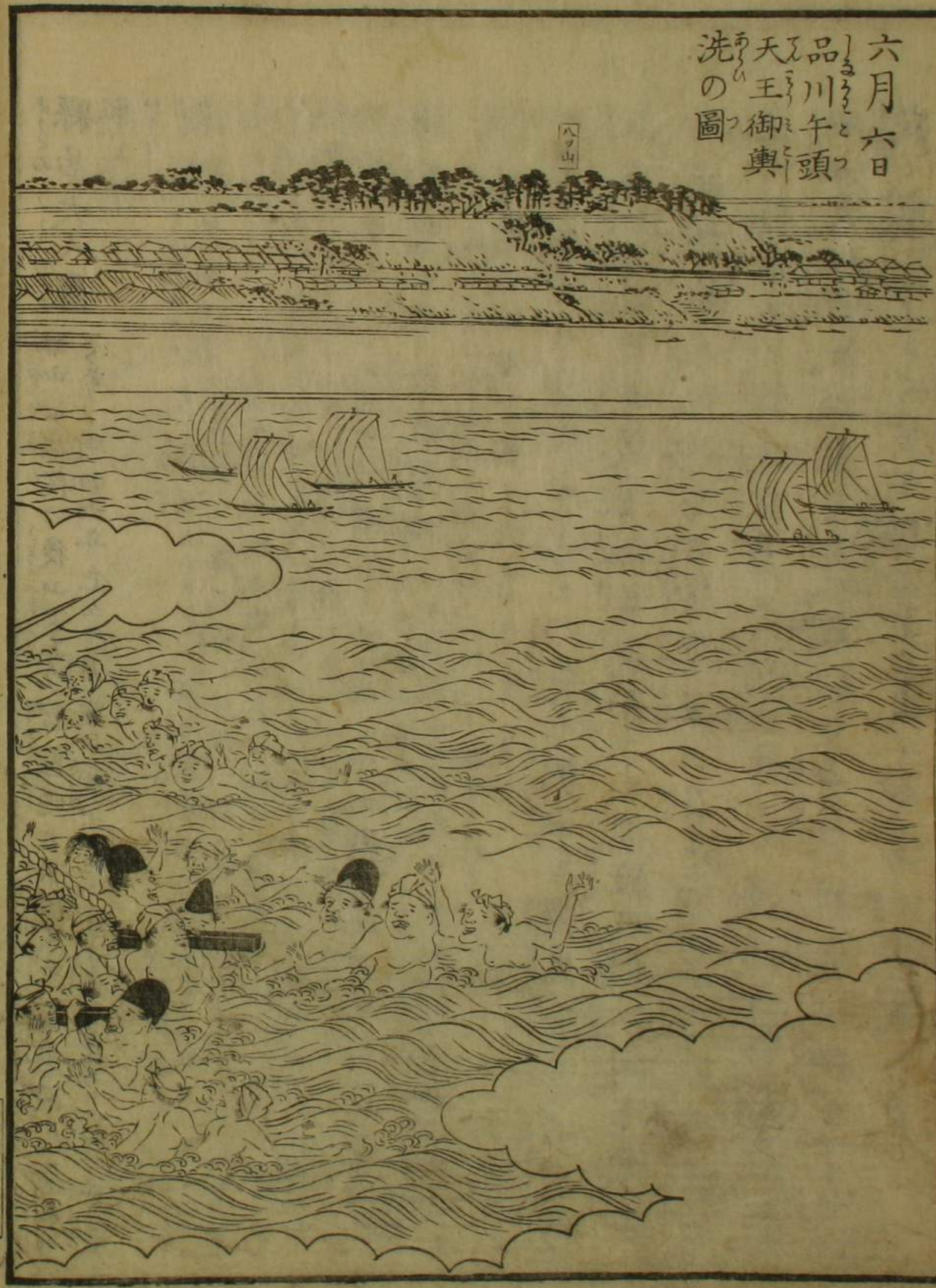
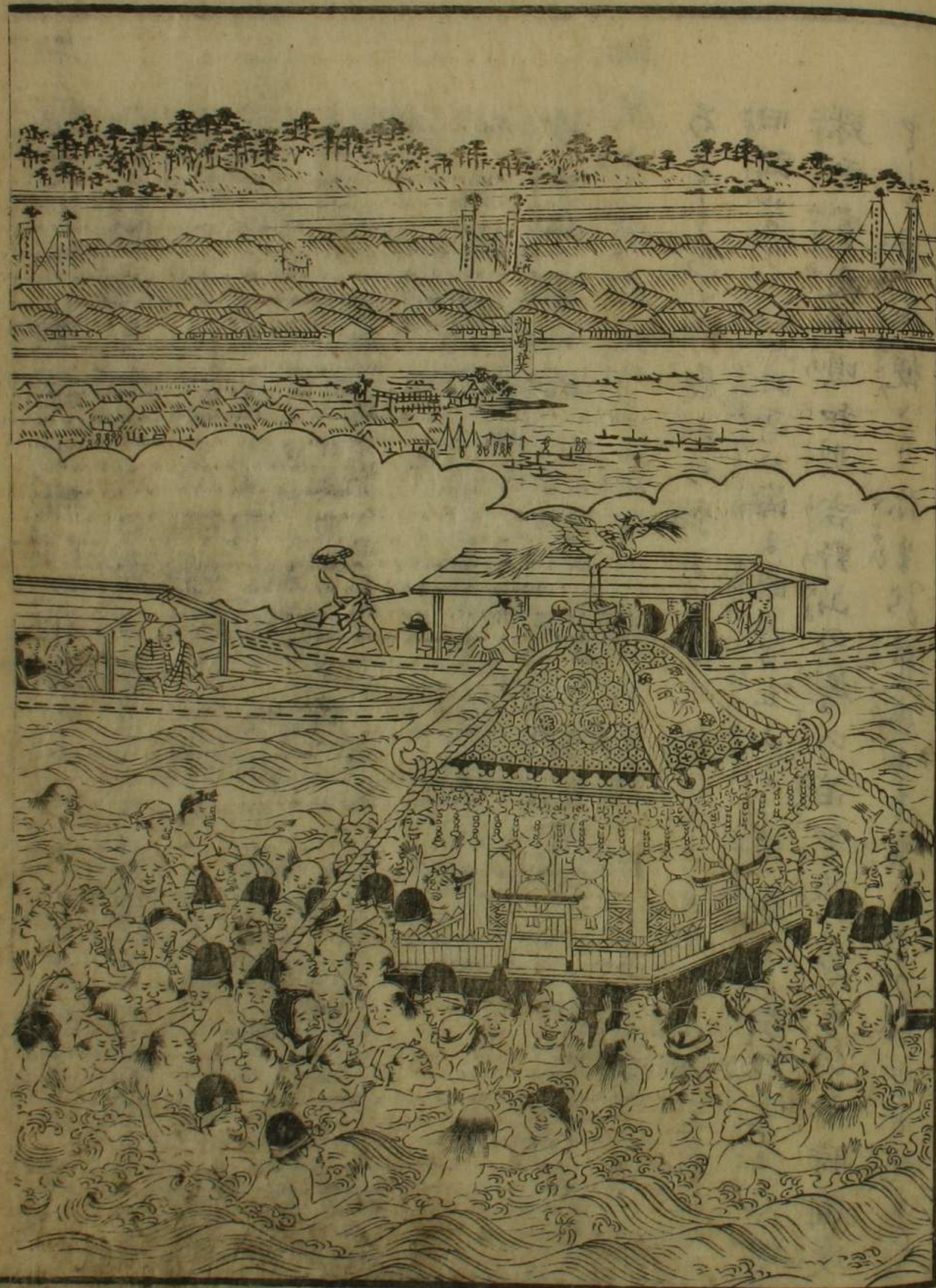
己巳より同九年壬申に至る 逆羽州上の山に謫せられ  
項の草蘆春雨庵と移され せり

此寺ハ岳川の勝區あり 門前の緑水を潺湲とく 岳川乃  
流海口を通を屋後青山崔嵬とく 祇植の祠松間を聳ゆ

茂林脩竹風帆沙鳥の勝覽筆の乃ふ 而もあはれ 殊更方  
丈の林泉を小堀遠州侯の差図中く 庭作の規範とて 都て

満地青松丹楓枝葉と交へ 晩秋の奇觀錦繡と晒り 常に  
寂寥とく 實は禪心とく 一巨藍とく

寂寥とく 實は禪心とく 一巨藍とく



六月六日  
品川午頭  
天王御輿  
洗の圖

八ツ山

牛頭天王社 東海寺柵門の外左の山に上りあり相殿は神明

宮を勧請を北品川の産土神なり東海寺の鎮守とせり

官造の宮社なり社領等あり神主は小泉氏也

中太田道真品川の城は勸清の所なり洲崎明神或は品川湖神ともいふあり  
祭祀ハ例歳六月七日は修行を南品川の産土神ハ貴船なり當社ハ由緒ありハ  
此橋を修合の橋と号く同十九日まき品川驛中往還の中央は旅所の假家と  
備けく神輿と

坂指荷 同本社の右の方には奥あり小坂を下る此名  
ありを靈驗ありとて諸人常は絶を崇信す

抄本神詠之碑 同所本社の前石階の上左の崖は臨みてあり石面は明石の  
浦の神詠と彫りあり神祇伯ト部兼雄卿の真筆なり

御殿山 同所北の山嶺なり慶長元和の間此地は省耕の御殿

ありし船小御殿山の跡あり土人相傳へく此地を太田道真居住の  
田趾なりとの此所ハ海に臨り丘山ありて數千歩の芝生ありと

殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植ふせり春時爛熳

やしく尤莊觀より弥生花盛なり雲と霧よりひ雪と乱まて

花香ハ遠く浦風ハ吹送る磯菜摘海人の袂を襲ふ樽の

前ハ酔を進むる春風ハ枝を鳴さる鶯の轉るも大平を奏

さる小似たり 寛永十七年九月十六日大樹此地ハ遊獵ありせられ頃  
御殿より澤庵和尚ハ和歌一首を詠とて旨命せしむ

夕ぐれと情をよむ木の間にをささのゆる海鏡は月 澤庵

月の光りの清杯よりつりくるは松一首と 上意あり前の日雨の降り  
し其日ハ止る空晴るよりありしうハ

今日の情をよむ松老と清は山はかひありと 全

享保の頃檻を多く植ふむ晩秋の紅葉も又一奇觀なり

鑄鐘松 増上寺の鐘を鑄る地あり其跡の  
印は植ふる松なり北の方畠の中ハ存せり

問答河岸 又舟船雁木といへる新宿の東の海岸なる相傳入

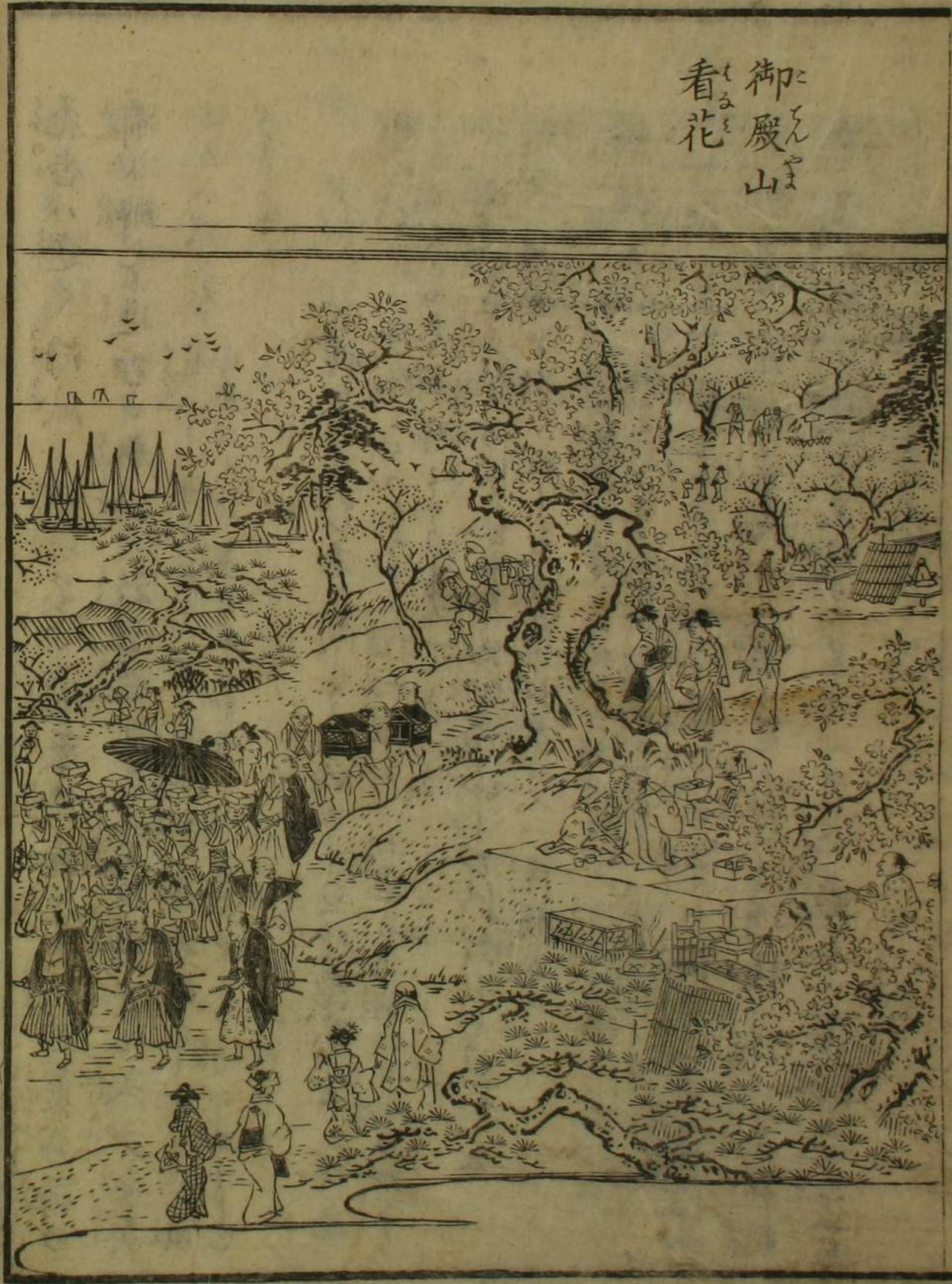
寛永の頃 大樹東海寺へ至らせり頃澤庵より此時

澤庵和尚澤庵後を見送りたり此所迄来り 澤問答あり

しとわく故に此唱ありしなり



御殿山  
看花



磯の清水



磯の清水

涉殿山の麓清水横町と云ふあり往古ハ此辺まて

磯辺なり

此井清泉や〜早魁やも個々なり

とく

或人云く昔砂利を堀

品川驛

江府の喉口や〜東海道五十三驛の昔なり日本橋

より二里南北と分つ

東海寺の南は傍貴船の社の側を流る川を堺

旅舎数百軒端を連ね常々賑々々往來の旅客絡繹と

絶を

梅花無盡藏日品川注云隔五十町有江戸城多

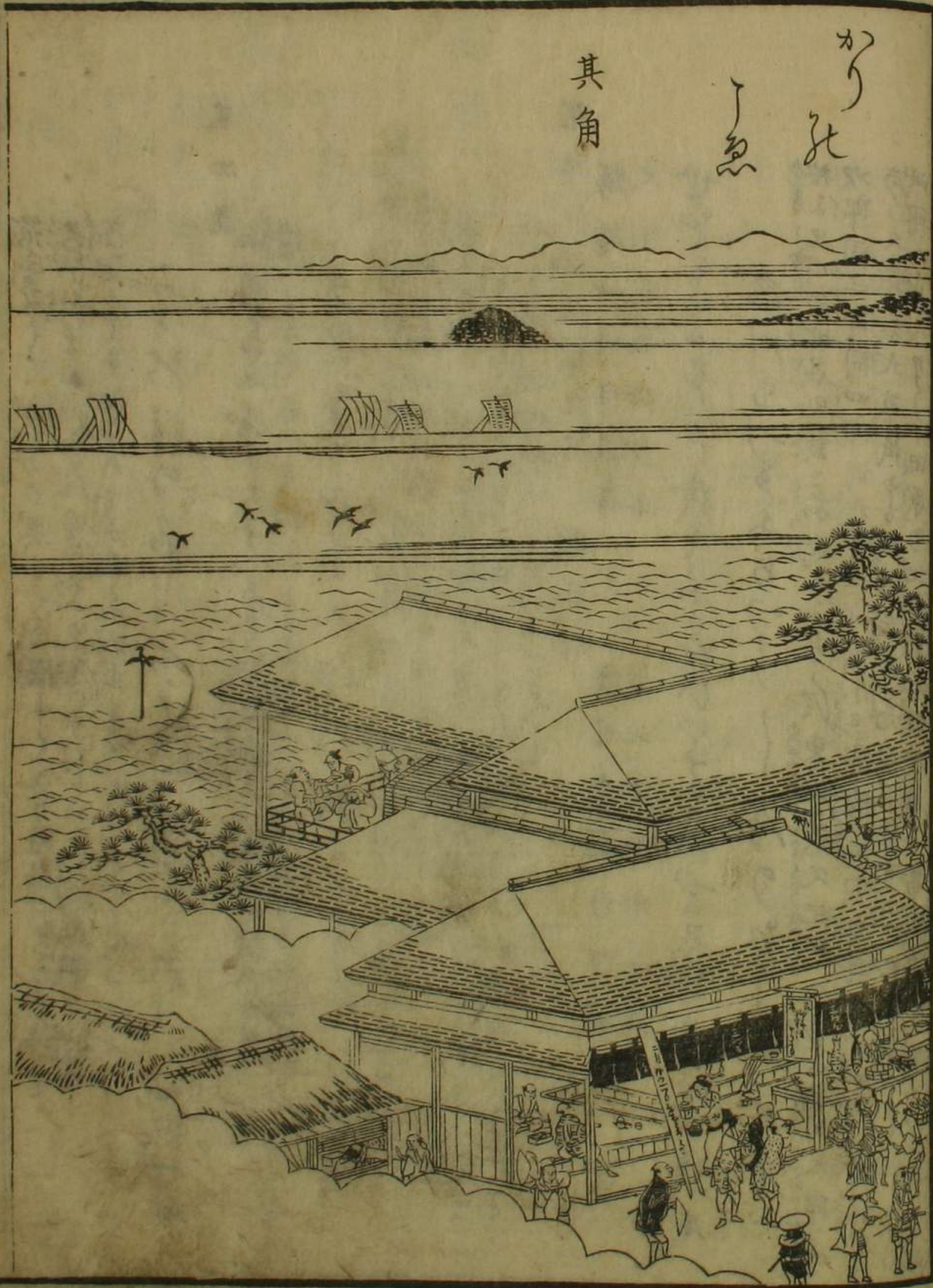
同書蓮紅二五層兼一層別小春二子問宗盲谷法華僧

之途城壁也瀆而見丁未小春二子問宗盲谷法華僧

心敬僧都記重潮城日勤塗壁馬触上吟看搬土船詩

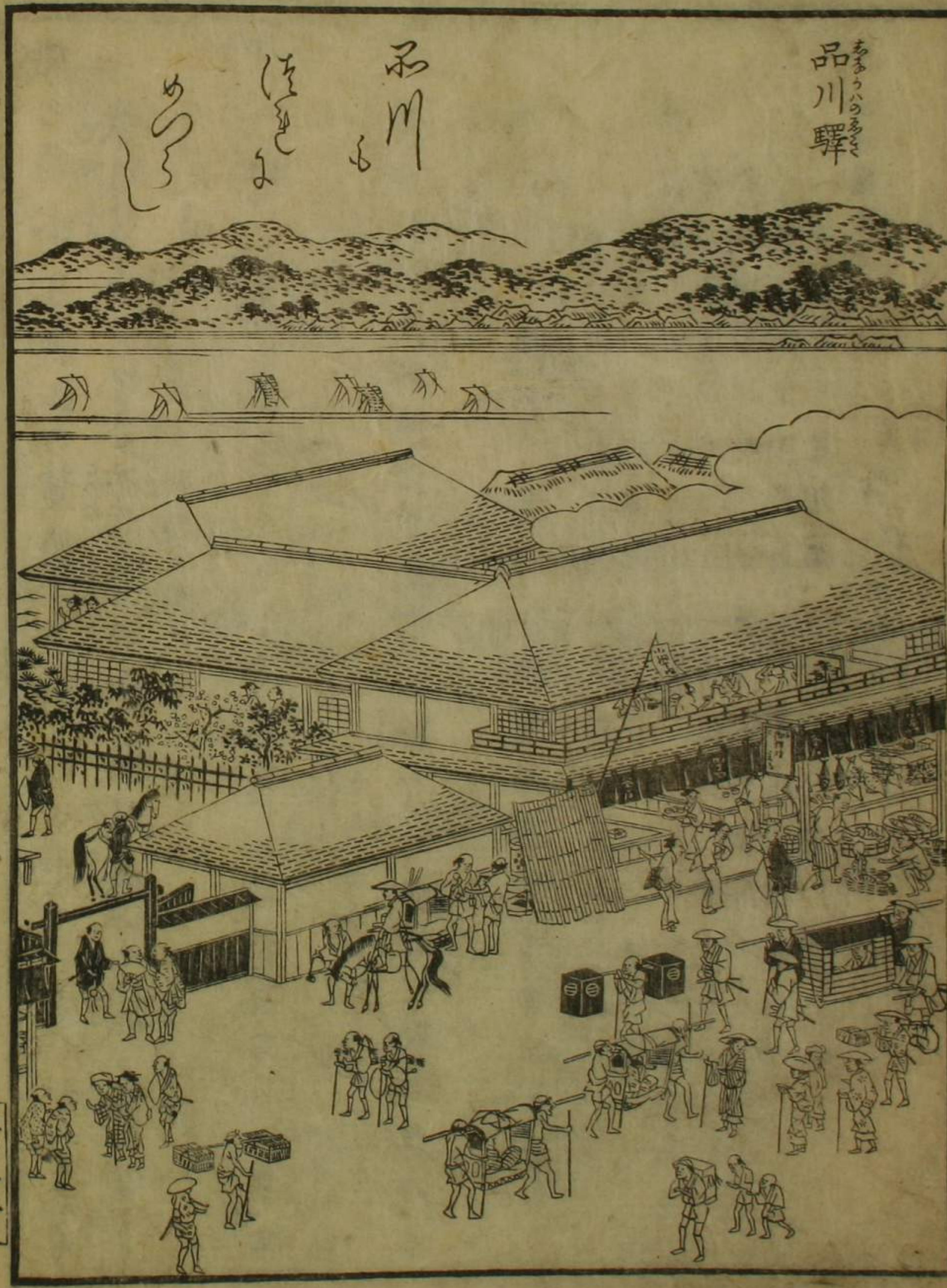


其角  
か  
し  
北



品川  
し  
は  
川

品川驛



此の寺の所て... 心敬僧都

東土産

品川... 宗長

江春入... 宗長

按宗長... 宗長

此の寺... 宗長

澤庵和尚... 澤庵

橋過品川... 澤庵

又相別去... 澤庵

世と... 澤庵

品川... 澤庵

其角

按品川の地名... 其角

次郎同三郎... 其角

此の寺の住人... 其角

川南北... 瑠璃山光巖寺

瑠璃山光巖寺

は属せり本尊薬師如来

建立ゆきその影像もあり

恭敬山長徳寺

四丁目より時宗

属を一遍上人

二代真教房の草創

如来八定朝の作なり

中の橋 品川驛舎

故号とを此橋下を

永平三年月  
 後奈良院御撰  
 謎合さふ  
 海のそ  
 十里ふ  
 多しん  
 蛤



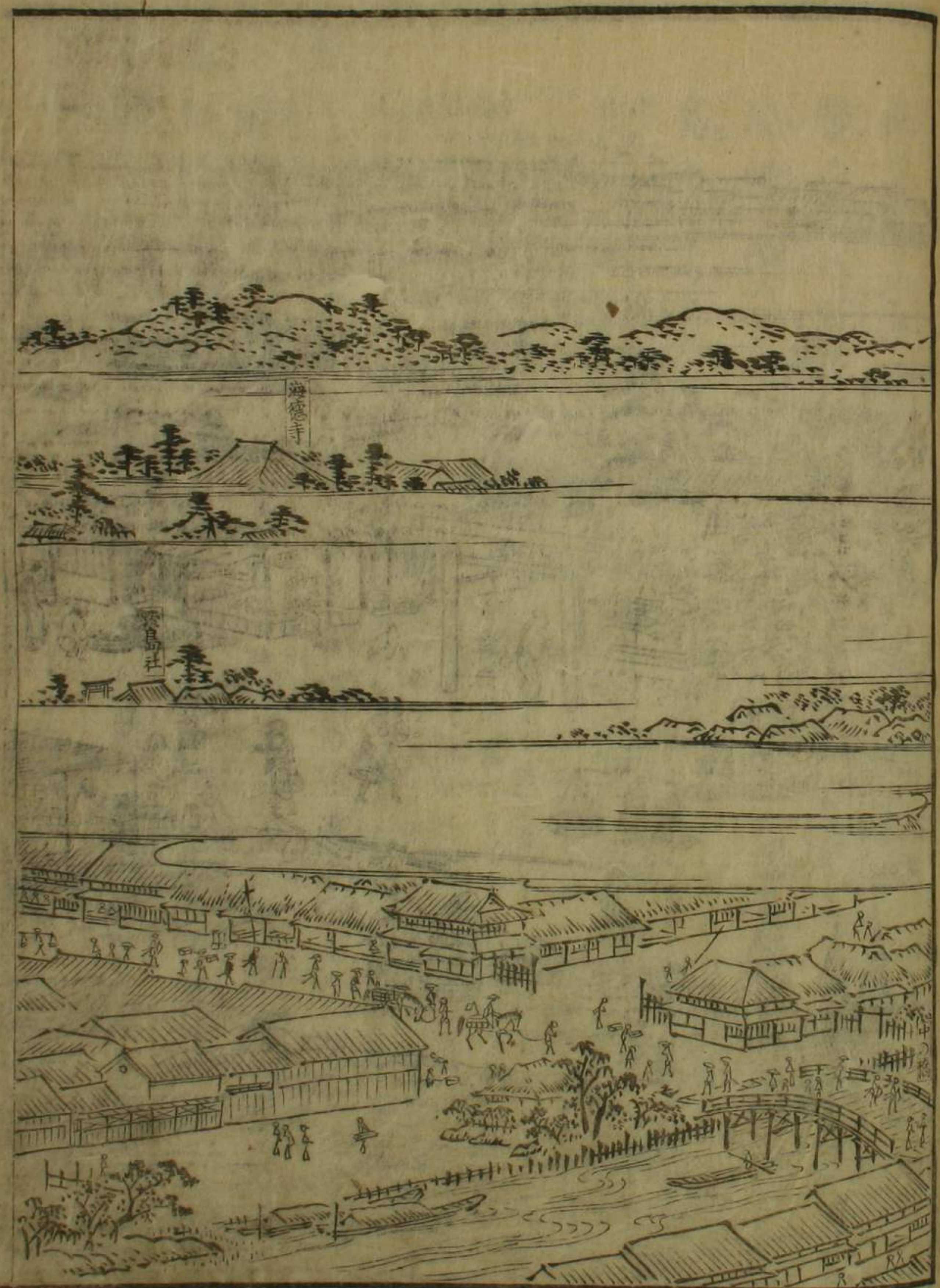
品川  
 汐干



洲崎弁天



東流するものを則品川なり毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭  
 天王てんこう神あん輿よ此橋上より行達ゆきあひあり依より又里俗とそく行達ゆきあひの橋も唱となへり  
 貴船明神社 驛舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右より  
 あゝ相殿あひだんの神明あんと牛頭こつ天王てんこうを合祭あひさいを南品川の産土神うぶぢかみなり  
 毎歳六月七日ハ天王の祭礼さいらい中なかに其前そのひ神輿あんよを海中かみちうより昇入あがひせり  
 後驛中のちのちの假屋かりやを假かりげかゝる神幸あんきうありなり貴布祢きふねの祭さい  
 例ハ九月九日神明あんめいハ同月の十五日なり 神主鈴木氏奉祀かみね  
 寄木明神社 南品川の洲崎すゐさきあり相傳あひつての神代かみよの昔弟橘媛むかしあなづきひめ  
 日本武尊やまとたけのみことと共に王船みまふねに乗のりし此海上このかみを渡わたりし頃ころ覆かぶりし  
 その船材せんざい所ところの浦うらに漂ひたりし此地このちに流ながれしよりより一いつハ土人とじん  
 一社いつしやに奉たてまつりし弟橘媛むかしあなづきひめの靈たまを祭まつりし寄木明神かきあけのみことと号なづけし又寄また  
 作つく遥とほの後のち船魂ふねたま西宮大神さいみやのおおみことを合殿あひだんとて往まゐり古源義家ふるげんぎけ朝臣あそ奥州おくしゅう  
 征伐せいばつの為ため東國とうこく發向はつかうの時とき此地このちに馬うまを止め漁人いしやうじんに當社あつしやの来由きゆうを



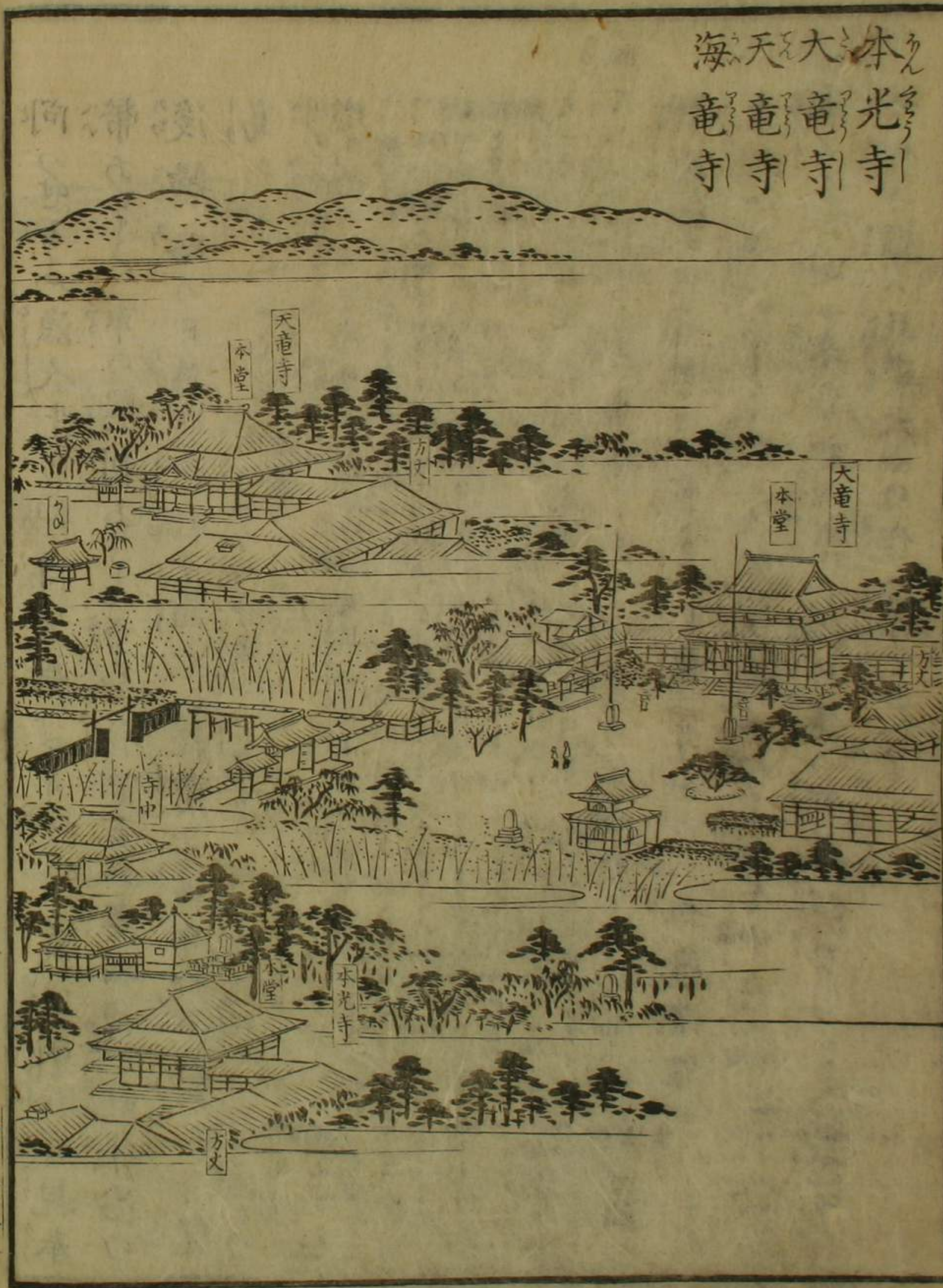
貴船明神社  
きふねあけみんじん



寄木明神社



向つせり漁人先の神傳を答へり一ハ義家朝臣自親奉  
 幣ありて軍の勝利ありん事を祈るハ奥羽の逆乱平治の  
 後歸路の日再び當社に詣てられ兜を収め故に此地を兜  
 島と号するを  
 往古ハ今の伊殿山の麓より南北宿の辺ハ一面の洲あり  
 漁家のとこり山岸は傍ありて後世洲の間に  
 川の流ぬ今このやうな北の島又橋渡の衣の流ぬとけく二社と一社  
 伴の兜の紐を神辨とせぬ故に島又橋渡の衣の流ぬとけく二社と一社  
 一説に山の林より細く海中へおろす洲崎の形似たりと云ふ  
 一社ハ洲の崎ありて洲の崎と号けり後には至るハ洲の明神と唱へ又  
 諏方明神といひ誤る此社ハ今引く妙國寺の鎮守と云ふ也  
 附く此洲崎の地ハ往古より往還の船を改し所わく遠見の番所と居置北条  
 又山内上杉の家々の制札教箇の條目と注せり今も從此地何某の家は傳へり  
 經 王山本光寺 南番場ありて日蓮の宗流なりて京師妙満寺派の  
 觸頭江戸三箇寺の一室より永徳二年壬戌二位權僧都日什上人  
 草創の佛刹なりて則上人を以て開山祖と稱せ中興ハ日鏡上人あり  
 本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならず又境内鬼子  
 母神の像ハ日蓮大士の作なりといへり



本光寺  
 大竜寺  
 天竜寺  
 海竜寺

開山日什上人墓 當寺累代住持の御塔の内並に建日什上人の墓三年甲寅三月十七日

味法相惠の宗立、蓮師の弘法、法名を日什と改む同年の夏、關東を以て花洛に至る其徳行嚴肅と譽れ、一法を二條授政原義満公とて、室津延長の所行精誠と稱せしむるを帝尊感ありて境を賜りて同年七月正二位僧都に任ぜしむるを浴内弘宗の勅免と稱せしむるを其年關東に起き同二年為國に至り此塚は本光寺と尊建を同三年癸亥京師妙満寺を開創し、入と尊き大法義を弘通せり又京師在任年月を經く明徳三年壬申再比開創し、入奥州會津の妙法寺に入同年二月廿八日化寂あり歳七十九と云く以上法華靈場記より

當寺往古ハ真言の古刹なり、日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ

今の宗風は轉々法華道場と則上人創建の體用六箇寺此一真

ゆり、當寺を用ひの長と稱せざる是なり、六箇寺とは所稱奥州會津の妙法

妙立寺相州鎌倉の本興寺、慶安の頃、大樹此地法遊獵の頃當寺小

京師の妙満寺及び當寺と、上意ありしとなり、境内昔ハ古松多かり

一故よかく名つけありしとなり、熊野山常行三昧寺 同所はあま天台宗中々東叡山は屬を相

傳入 仁明天皇の嘉祥元年戊辰慈覺大師常行三昧を修

行あり、白跡中々則當寺の開祖と稱せし本を阿彌陀如来

同大師が彫造なりといふ、鳳凰山天妙國寺 常行寺の南海道の右にあま日蓮大士の弘法

一々京師妙満寺の觸頭江戸三箇寺の隨一なり、本堂日蓮大士像 天月上人授与の靈佛なり、五層塔 文安年間

多寶塔 造營あり、詠訪明神祠 當寺の護法神なり、此祠ハ先記

崎明神と稱せし後世誤り傳へる洲の四社と唱へ又詠訪明神祠ハ先記

祠と稱せし、來由を失ふに至る土俗は、昔ハ社鎮の地海の面へ

十八丁四方ありしと云く、二王門 左右ハ金剛密跡の二王の像と置運慶

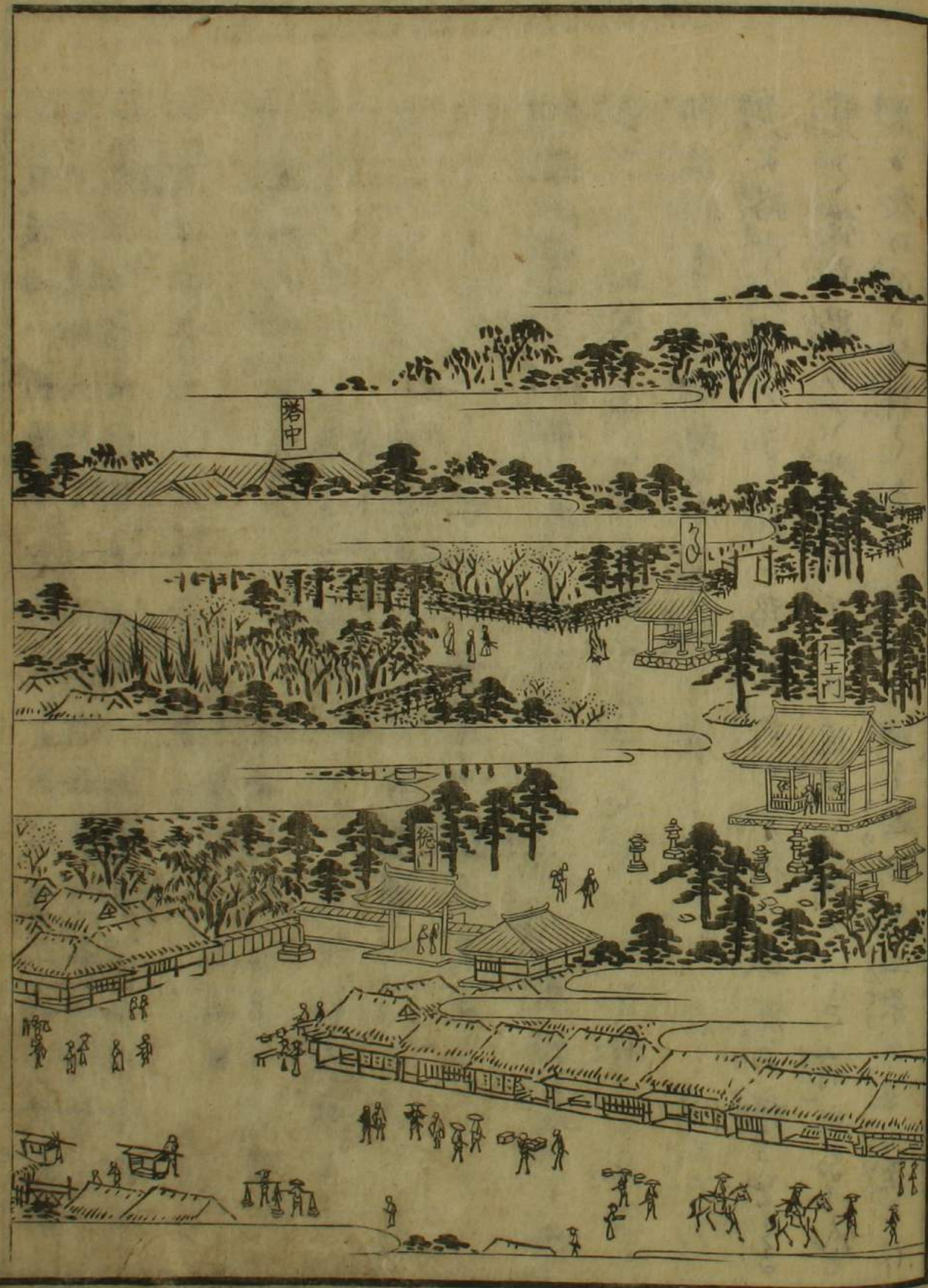
山王宮の二王、山王宮後東叡山へ、總門 東海道名所記云く妙國寺

駿河大御言慶の屋敷の形成門を引く建り、鯨鐘 文安中鑄治せし

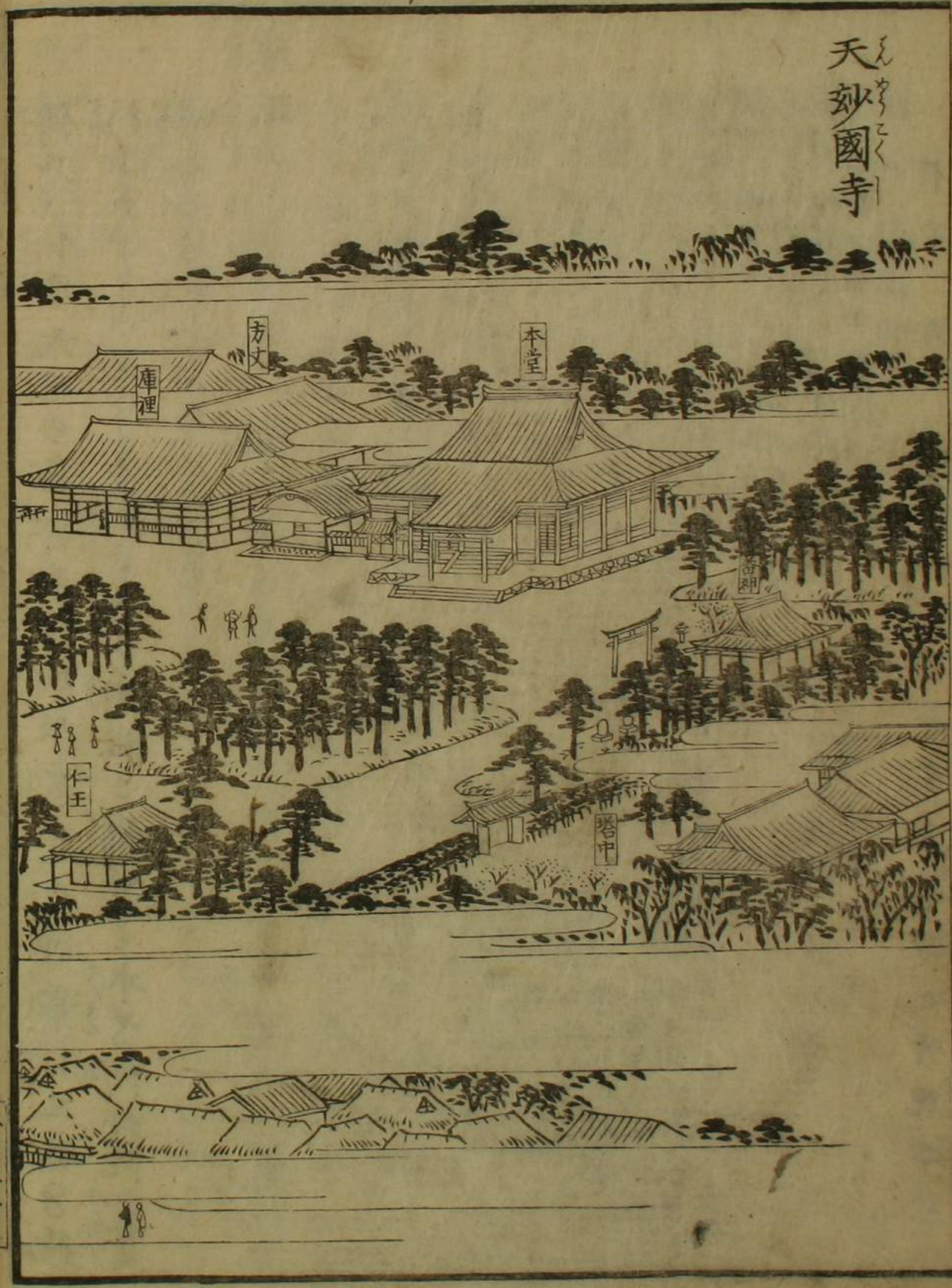
往代鐘銘曰 聖衆之影向宛如萃散風結縁之得脱亦似

鯨鐘 文安中鑄治せし、寛永十八年鑄改しと云く、日蓮の





天妙國寺



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄  
一口鐘祈三身之果善根廣無限功德遍有幾  
大日本國武州荏原郡品川郡妙國寺住持法印日  
文安三年丙寅季冬中旬第三天  
檀那沙弥道胤  
鑄師和泉權守貞吉

寬永十八年辛巳八月下旬  
洛陽妙滿寺三代目三十三祖日延再興之  
大檀那沙弥道胤  
鑄師和泉權守貞吉

江戶施主當寺一代目結諸檀那  
長谷川豐前守藤原重次

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人中老僧の草創あり佛  
場中々至徳二年乙丑寺主日齋師東國の乱を避んる為且々  
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京よ赴くれ頃或夜乃  
夢よ洛中いつくとおくれと路傍柳の大樹ハ鳳凰の栖ると  
覺る後自思らく此瑞や正よ我道場を閑くへき前兆あると  
直よ夜の明るを待く急き洛中を廻り西洞院三條の辺小至るに

果々大樹の柳の茂るあり則夢兆應なりと其地を開き  
一字を當り鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士よ天目上人ハ附屬  
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む其旧品ハ花洛西洞院  
三條の南よあり今都七  
名井の中柳の水と嘉慶元年丁卯天下疫疾流行を後小松帝  
詔あり師とく此災を除くむ依奇驗の料とく康應元年南北四丁  
東西二丁此地を賜り然とくとも其寺院ハ明徳の大乱よ廢せる  
故よ寺を妙滿寺よ撮む彼大曼陀羅并蓮師親筆の  
其後旧里を  
慕ひ又武州よ至り天目上人の靈蹟を興起し舊貫よ復さんと  
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鐘銘道胤品川領主鈴木光純  
等齋師の誦演よ信伏し七堂建立の財とく齋師小力と  
をありせ文安年間彼旧地を象し則鳳凰山妙國寺と号け  
當寺を開創し此地境寄附ありし上杉憲泰の  
證状ありと文安よ  
先立ち九十有餘永享六年前の將軍義教公の執り上杉憲泰  
朝不審とて

先境の由緒を奉此地の四至と定りらる其外数通の判形の  
書あり其後天正十八年當國寺打入の時  
大神君當寺に入らせし止宿ありし其後寺領を  
賜りて朱章を添らる江戸寺社領を附し又寛永十一年伊奈  
半左衛門を奉移し諸堂を營建かたしめひ院主日延を  
し中興岡山たごき旨命せられ此時より紫衣を免る以て  
永規とす

上杉憲泰

宛乃武州荏原郡南品川之端芝原地より

右依佛地之和望永代八郎三郎之所補任之仍四至境  
東南八大道塚西八田塚北荒居道ヲ陽堀塚  
以之竹本可調植者也仍宛状如件

永亨六年甲丑五月十三日

憲泰 判在

妙國寺別當沙坊

同 寄進武州荏原郡南品川妙國寺地より

右彼地此間七字不分明南者四波堀塚西者大々道塚北者  
塔中塚彼内畠同勢阿弥作畠一段并四所之寄進地  
より寺家之内在之此外常金可作畠一段同東者海塚  
南者觀音堂垣塚西者大々道塚北者大堀塚為金澤  
智光院勿沙菩提并為南小路雲光沙菩提永代彼寺に  
令寄進處之然間至子之孫之於此寄進不者不可有異後  
仍寄附之状如件

永亨十年戊午七月十八日

憲泰 判在

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺之為禰預之状如件

亨德二年五月八日

從四位下 判在

當寺別當

制札妙國寺

右此為寺為手軍勢甲乙人等盤妨狼藉之輩  
停止之若至于違犯單者之處罪科状如件

大永四年正月十二日

氏綱 判在



其餘氏康氏昭等の證狀ありひ前上総介定景中務以補持助關善左衛門  
彈正左衛門植草新次郎等の刑形の書并は太田資正大幹加賀入道山  
德景判形の表ハ數通あり毎年六月廿八日由拂の頃諸人へ拜と一む  
海照山品川寺 同所南小隣る普門院と号を真言宗や一々京師

三寶院ハ屬を關山ハ權大僧都弘善法印と号せり

本堂 本尊聖觀世音菩薩 海中より出現ありし關浮檀金の靈像

世ハ水月觀音と稱へり此靈像の利益感応の事々々なる事ハあり

藥師堂 將の像を安置せし法大師作なり 紫銅地藏尊 門を入る左の

建立する所中一々江戸六地蔵の一貞あり

本尊縁起云く往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川

氏何某ハ附屬せり同左京亮迄其家ハ傳へり信

推督持氏と上杉禪秀合戦ハ及び一頃品川の一族悉く討死す

其時ハ深く草堂の内ハ秘り置しと後太田左金吾道灌

品川の地を領せし頃深く此本堂を崇信し一字を建立し

大圓寺と号し夫より後又徳倉管領上杉の両家不和の

關東大亂依り諸の寺社破滅せり少かり永祿九年

小田原の北条氏政今川家へ加勢あり信玄と戦ふ時信玄武

藏の北の方より不意に押寄せ江戸城の品川を追捕し民

家を焼拂ふ此時甲州方の中ハ竹森蔭村といふ二人の侍品

川觀音の御堂を焼く本堂を奪ひ甲州へ歸る其者大

狂亂一本堂元の地へ迂るべき旨威靈の示ありと武藏ハ

敵地なるハ其便をゆを一人の乞食の聖を頼り元の地へ還

座なりまるといふ御堂も焼亡しり其礎石の跡を

地を求めり形をかりの草堂を營て造り安置なり

遙々年月隔り後兼應元年壬辰法印弘善堂宇を建立

し名を海照山品川寺普門院と号し今來日降普門示現の

千躰荒神堂



威力著く惠日の光煩惱の闇霧を破る感應の水月ハ長夜を照す

千體荒神堂

同所半町をわたり南同一海道の右の方海雲寺也

昔九州肥後國天草荒神の原といふありしを邪宗門一揆の項邪徒等社を破却を故ありし當寺は勸請を以て靈驗ありし衆人常々系指す毎月廿八日を以て縁日とて祭礼ハ

三月十一月共々廿八日なり

補陀山海晏寺

同所一町をわたり南海道の右にあり曹洞派の

禪宗の三田の功運寺に屬し北條相模守平時頼朝臣の

開基とて大覺禪師を開山と稱し古山和尚を第二世と

天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺を再興し中興也



海晏寺

題海晏寺紅樹  
 古刹楓林簇晚霞  
 深深庭院駐年華  
 那知秋後風霜色  
 却勝江南二月花  
 春臺



海晏寺  
 紅葉見之圖





なる 慶和寺の和尚八松平因幡守康元の子なり 天正御入國の頃三州より  
 改らる 召き當寺を賜ふ曰く臨濟宗なりしと此時より今の如く洞家  
 改らる

本堂本尊 鮫頭觀世音

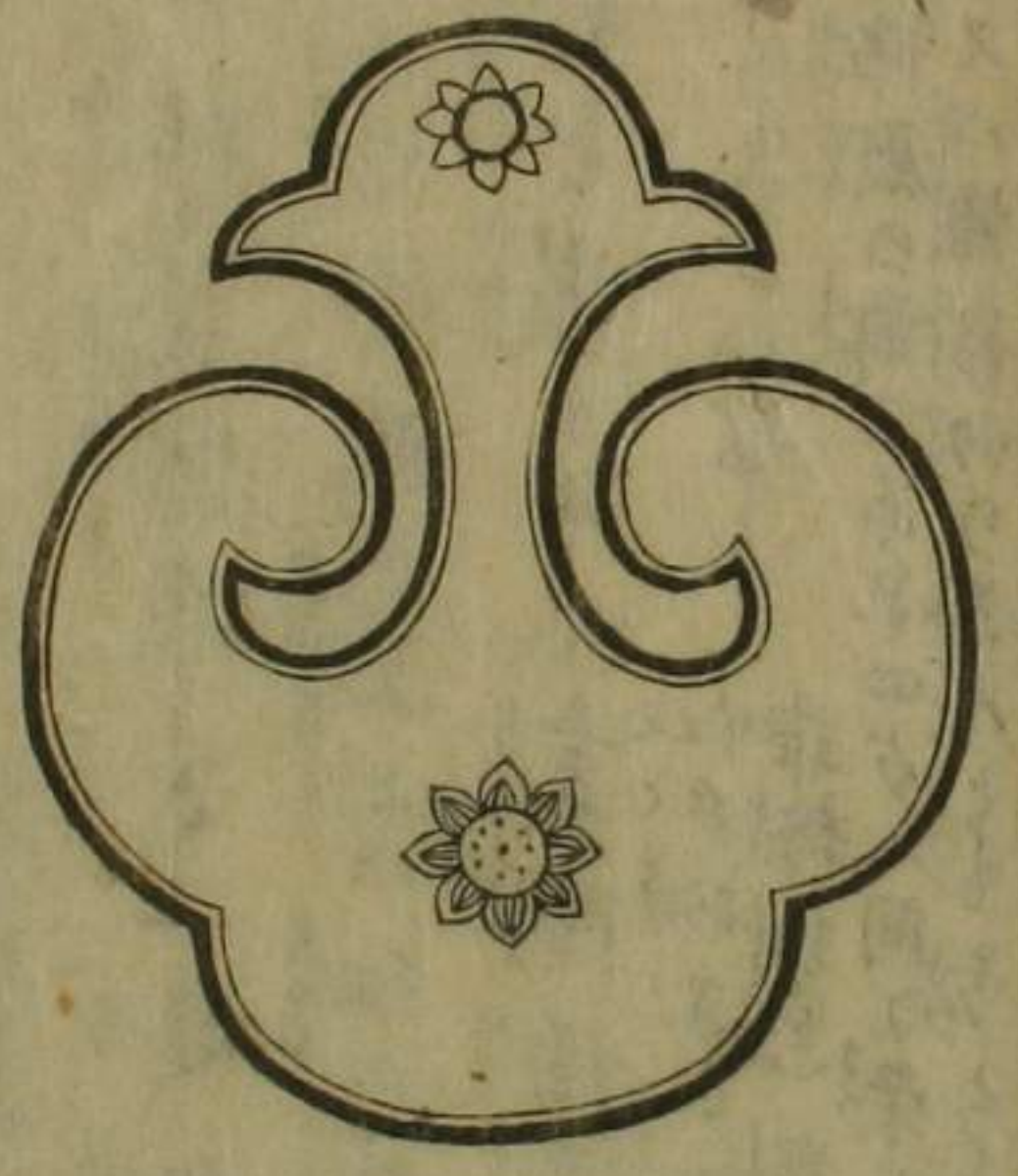
鐘樓 本堂の前左の方より元禄十五年當寺回録の災より罹り舊鐘  
 焼損を依り宝永七年改鑄し往古の銘を其終り刻せり

南膳部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷  
 補陀山海晏禪寺 爰十方施主屢捨祥財聚銅金專  
 命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落落々洪  
 音斯迺見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈  
 願此鐘声超法界錢困幽暗悉皆聞聞塵清淨證圓  
 通一切衆生成正覺是以虎溪老拙厥銘曰  
 鳴氏炉鞴四海九根 當陽掛起 法音千鈞  
 色透碧落 響徹刹塵 法輪常轉 佛日尚新  
 弘濟群類 普結良臣 法輪常轉 佛日尚新  
 寶德三辛未仲夏下澣 鑄師 佛日尚新  
 且越道琳現住 存紹代 鑄師 佛日尚新  
 寶永七中夏上旬

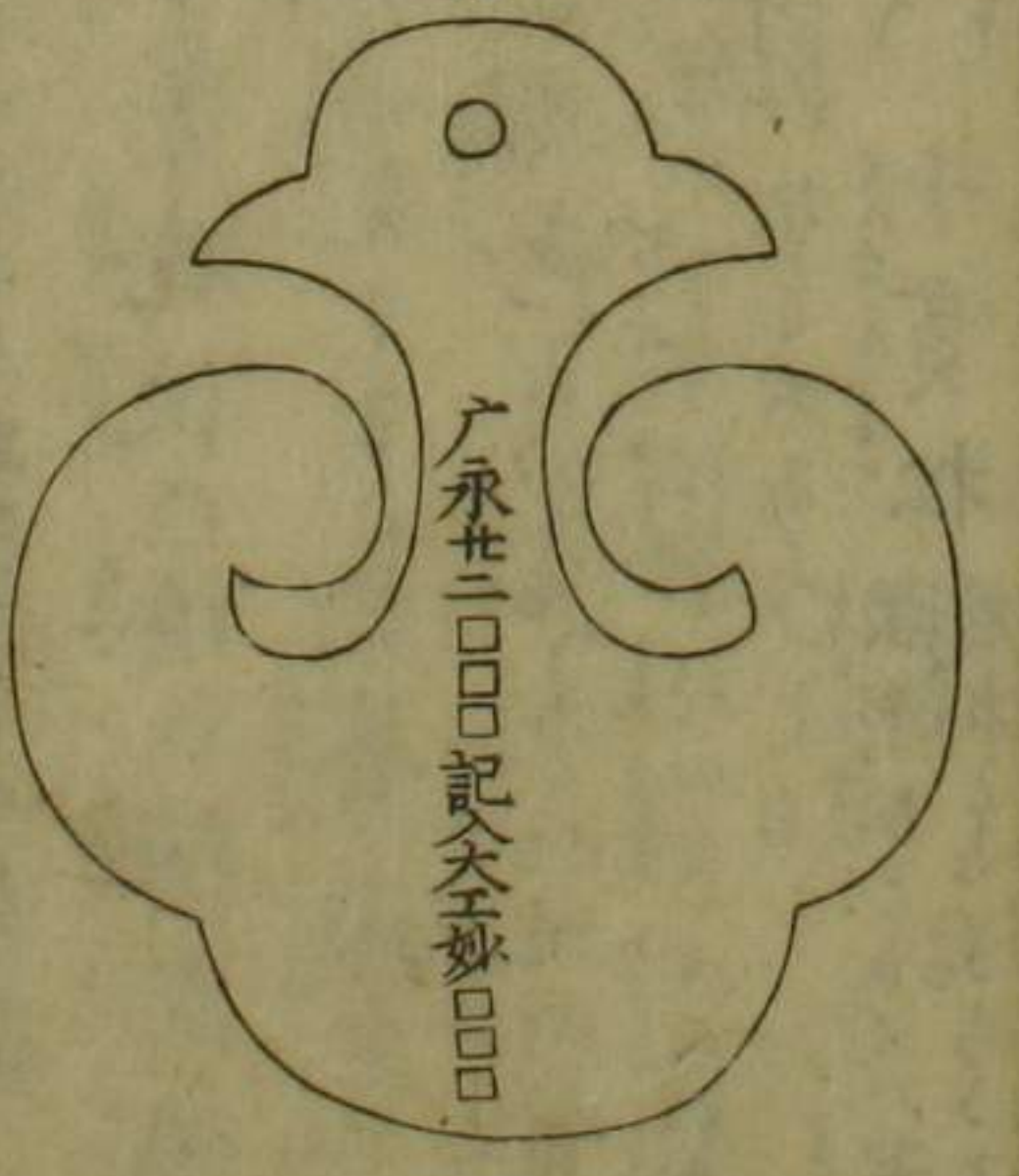
雲版一口

高四尺五分  
 横尺三寸五分

蓮花大サ  
 二寸四分



背



元禄二〇〇〇記全五〇〇〇

北條相模守時頼朝臣石塔 本堂の前右の方より碑面不最明寺殿  
 覚了房道崇碑陰弘長三癸亥十二月

廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり  
 按小東鑑弘長三年十一月二十二日松岡過去帳成列入道五位下行相模守  
 平朝臣時頼三十七最明寺の北亭ゆく卒去まとい今鎌倉山内不ある所此  
 禪興寺といふ寺院ハ古最明寺の旧地なる由鎌倉志より當寺に  
 ある所の石塔ハ其模一ナク石塔の形後世のものといふ

二階堂出羽守石塔 本堂の後の山腹不あり往古より當寺の門前ハ鎌倉  
 海道中ノ關門あり地なりと依り頼朝御より

北条家迄ハ執権の中より關門の守護と大森の辺ハ屋形を建てる官人を  
 置れし故に此出羽守も其項呂川の守護と云ふ地はあり一なれた  
 當寺を香花院とせしむるあり一ハ左衛門尉正五位下出羽守行義八道道空  
 按よ二階堂出羽守三人とあり

行藤正安三年八月出家... 七三八同從五位下出羽守入道道蘊吉野戒成の大將... 三人あり何れも是なり... 寺僧相傳へ二階堂出羽守行氏の筆... 宇下住し弘長三年十月出家... 一歳小し卒

梶原平三景時石塔 同所小並入景時謀叛を企て治二年庚申正月廿日... 北条左京権大夫平時宗石塔 同所小並入景時謀叛を企て治二年庚申正月廿日... 宝光寺慶道果大禪定門と号せ 將軍執權次房弘安七年甲申五位下相模守平時宗三月廿台所旁四月四日出家法名道果同日酉時死三十五云

楓樹江戸丹楓の名勝ゆく一奇観ゆく 晩秋の頃ハ満庭錦... 浦と晒まゆくめく海越の山ハ紅の葉分小見えゆく 蒼海夕日小... 映しゆく又紅を濯ゆく 書院僧房も其色よかゆく 此地遊賞... の人酔色なゆく 菲梅紅葉 千貫松 燈松とも号る

龍湫 庭前の池とゆふ 両溪橋 浦手洗池は架橋下の池と龍の... 梶原屋敷 梶原塚の石地藏 蓮菜山 蓮菜亭と云あり... 推現御手洗池 延命水 明神森 山王社 八幡宮

寺晏海

總門額 二階堂出羽守 行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地ハ海... 中より較一口漁夫の網よかゆく揚れを腹中より正觀音の... 靈像を得ゆく 此より鎌倉へ聞えゆく 時頼朝臣希代ハ... 淨土なれハとて補陀山と号し四海安平の義よりて海晏... 寺とせける瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり同... 六年の春緒堂落成し翌る七年入佛供養を修行を較の

地を鯨濱と云ふ又鯨頭嶺と云ふ海の方百八十間余又時頼朝臣南北十二町東西十町の地を寄捨ありて五箇の僧坊は百八十貫文を附せりる八十宇の房舎ハ巍然として覺をなす又天竺の靈鷲山は準へ南紀の高野山に擬しあひて有信の輩ハ月牌を置石塔を建弘安五年ハ北条時宗願主として堂塔重修せられ月牌料とて二十貫文寄附ありと云なり殊更重罪の輩なりとも當寺は入者ハ其罪を免許せしめ則を定めて山庫僧供ハ四方十里の間頭陀の免許ありと云なり住古當寺開創の頃松樹各二十株を植洲崎ハ八幡三社を營建其松の枝葉は路を覆ひて繁茂せし其頃郷童の唄ハ品川浦ハ名所なり海晏寺前のまうと松所代もさうえくゆくと所よと祝ひとなり鄙言奉ふ堪と云々

鯨頭明神祠 砂水の海濱ありて祭神詳ならず土俗傳云往古此地一丈餘の鯨の揚るありし其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ此鯨の祟なるんと恐怖して漁人其頭を一社の神に祀りて附會按此祭神を鯨の頭と云ふ所ハ海晏寺本尊の縁起ハ混同附會せしなり或人云く砂水昔ハ鯨洲は作りたりと云ハ鯨洲の明神と作て

上古海道 品川より池上へ行道大井あり北の方東海寺南門は向の谷往古の品川の驛路なり

矢口と云ふきし所也今ハ景坂あり西南池上へ行道ハ昔の一里塚の榎一株残まり又其辺の藪中ハ標の石今も存せりとなり延喜式大井驛傳馬のり證と云へり

諸國驛傳馬 中略 武蔵國驛馬 店屋 小高 大井 豊嶋 各十足 下略

海賞山來福寺 砂水御林町ありて真言宗中々本堂小地藏菩薩を安置せ弘法大師の作寸八分あり梶原氏の草創也

則此地ハ其宅地なりと云ふ縁起云此本堂ハ梶原氏代其家小相傳く尤靈威なり然元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ此本堂に祈念して不日よ本快を得たり其後世の中大に乱る本尊の所在を忘れりし小文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町西の方徑塚と云ふ地やこれを感得せしとなり

徑塚の來由ハ次ニ詳なり

住なるんを或洲子と云く此所ハ佐美津川と云細き流の瀬と交らるし佐美津

その名なりと云各付しとのあり標記正せしきなり

土人今も元其道筋大井荒蕪池上

品川今も元其道筋大井荒蕪池上

今ハ景坂あり西南池上へ行道ハ昔の一里塚の榎一株

残まり又其辺の藪中ハ標の石今も存せりとなり

延喜式大井驛傳馬のり證と云へり

武蔵國驛馬 中略 大井 豊嶋 各十足 下略

真言宗中々本堂小地藏菩薩を安置せ弘法大師の作寸八分あり梶原氏の草創也

則此地ハ其宅地なりと云ふ縁起云此本堂ハ梶原氏代其家小相傳く尤靈威なり然元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ

此本堂に祈念して不日よ本快を得たり其後世の中大に乱る本尊の所在を忘れりし小文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町

西の方徑塚と云ふ地やこれを感得せしとなり

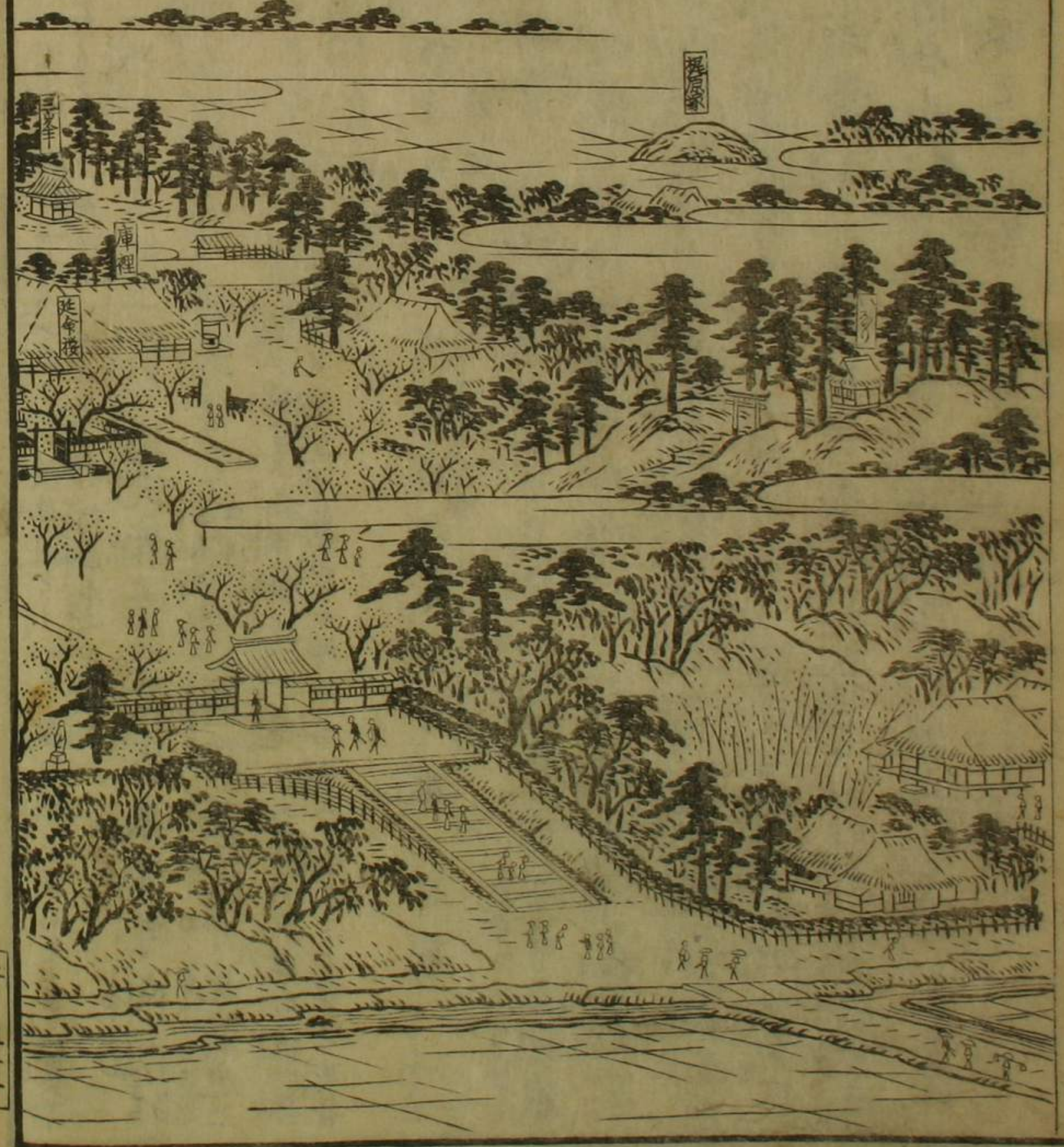
徑塚の來由ハ次ニ詳なり

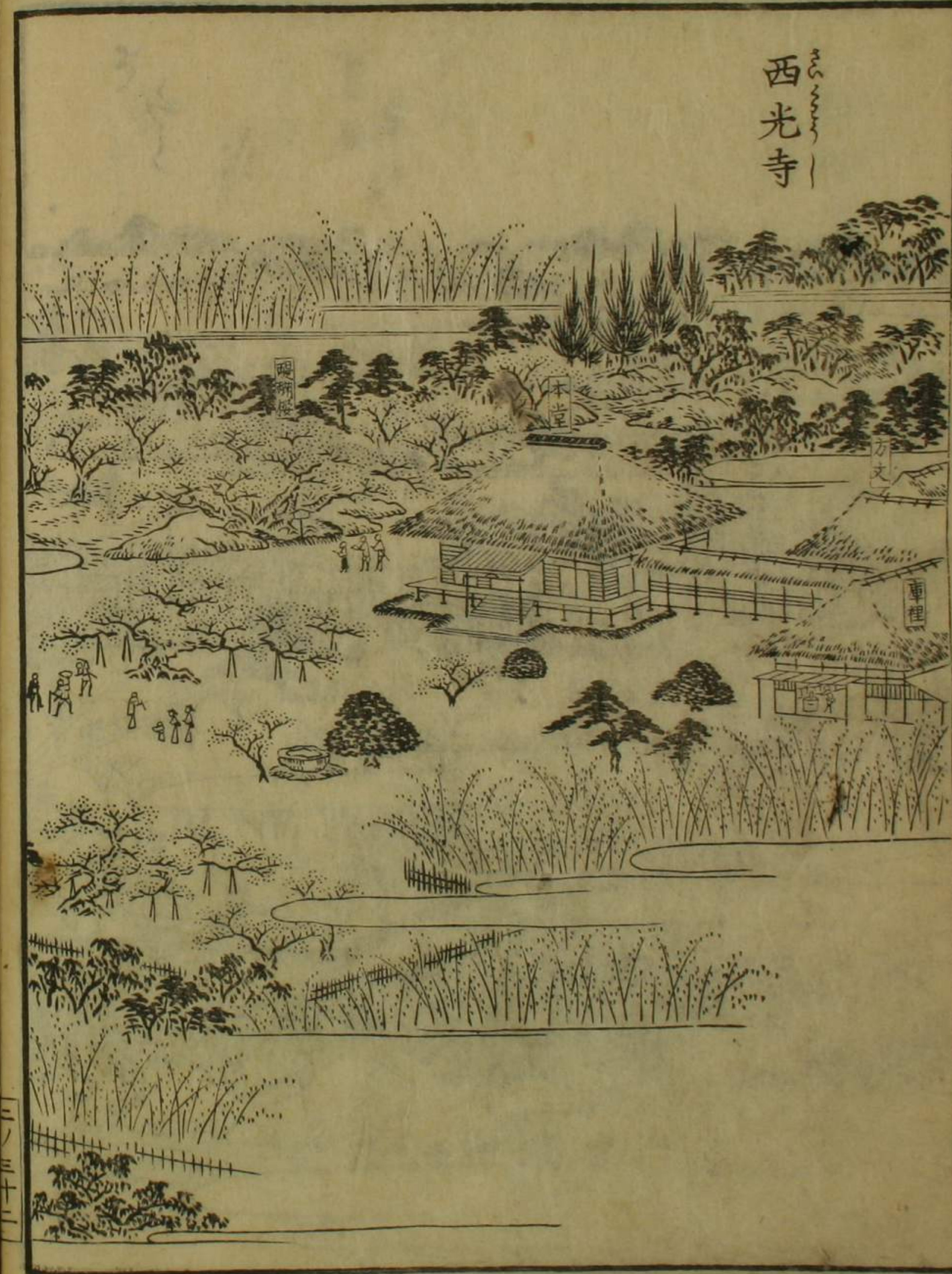
雪中菴  
蓼太



来福寺

世の中  
三つ  
る





弘福寺



按當寺開基梶原氏と稱するもの小田原北条家の幕下たり梶原日向守なり一永祿二年の頃六郷内新井宿の地を領せり北条家所領役帳よりんそより是より考ふ此所日向守の采邑の地なり又其宅此所ありと思はれり土氏お侍其宅の田跡ハ来福寺ありハ秋水松平土佐侯の別荘の地なりともいへり

延命櫻 本堂の左の方 梶原松 同所あり 梶原氏 梶原塚 寺の後

あり塚上は杉を植へり此辺農氏の構の中にも梶原塚と号するものあり是も其氏族の墓所なり其れ一族の石塔當寺あり

當寺境内櫻樹數株あり悉く品を領たり弥生の花盛

わハ遠近蕙を慕ひくあふ遊賞する人少りす

納経塚 来福寺より六町を西にあり相傳へ往古右大将

頼朝卿佛經を書寫なりあひ此地は収りたり来福寺本

尊地藏菩薩此所より出現しあひ一頃土中にて夜な

讀經しあひしを 故に來福寺を尊と稱せり

松榮山西光寺 同所二町をかり南にあり弘安九年の開創なり

とりの往古天台宗なり榮順律師開山たりとあり其後

大井おおい



親おや鸞らん上人じゆんじん弘くわん法ぽうの道どう場じやうとも當あた寺てら十五ごじゆ世せいを空くう善ぜんと号ごうは芳ほう賀が入にゅう道だう  
 禪ぜん可かよりも十四じゆしゆ世せい芳ほう賀が伯はく耆き守しゆ後ご五位ごい上じやう清せい原げん真ま人にん元げん則そくの長ちやう子し小  
 して俗ぞく稱ちやうハ武ぶ藏ざう五ご郎らう西さい光くわう又また幼ちゆう名なを伯はく王わう丸まると号ごうへも今いま當あた寺てらを西  
 光くわう寺てらと号ごうを此こゝ西さい光くわうの名なを摘とく号ごうけたる寺てら寶ぼうに  
 武たけ田でん信しん玄げんの陣じん羽う織ちと称ちやうするをのを収とむ庭てい前ぜん醍たい醐ご櫻えいと名  
 する老らう樹じゆあり花はなハ單ひつ瓣ぱん中ちゆうに立た春はるより七十しちじゆ日にちの頃ころより開  
 くるを其その余あ初はつとへの櫻えいの老らう樹じゆ数すう株くわあり満まん花はなの節せつハ奇き觀くわん  
 あり此地このち第一だいいち花はなの名な所しよなり

大井山弘福寺 西光寺より一丁をかり西南しんなんあり當寺も鸞師の  
 弘法くわんぽう中ちゆうに本ほん尊そん阿あ彌み陀た如にょ來らいの像ざうハ聖せい德とく太たい子しの作さくなり也  
 此この地ちハ麻あ布ふ山さん善ぜん福ふく寺てらの中ちゆう與よ了りやう海かい上じやう人にん誕たん生じやうの旧きゆう跡せきあり  
 弟あに三さん卷まき麻あ布ふ善ぜん福ふく寺てらの下したに詳しやうなり當寺あたてらの櫻えいの老らう樹じゆあり春はる時とき奇き觀くわんなり  
 了りやう海かい上じやう人にん産さん生じやう湯たう井い寺てらの後ご園えんはあり少すくなり岳たけの下の横よこ穴あな泉いづみあり  
 横よこ穴あなは入り深ふかくともあり又また當寺あたてらハ大井おおいと

同三郎等の名あり何れも此地より起る人ありん  
東鑑に大井太郎長同次郎實春

鹿島大明神社 同所一丁を西にあり社記に云く當社ハ安和二年

己巳九月十九日常陸國鹿島の御神を遷し奉ると云く別當也尔現

山常林寺と号は天台宗なり東叡山に屬せり本尊ハ藥師如来

慈覺大師作開基ハ尊榮法印なり貞和三年丁亥再興す了覺

阿闍梨と中興と稱せり境内櫻多く春時一奇觀たり

本地堂 智燈大師の作ありと云く

古鰯口 別當常林寺に取む松女敬白とある上の文字よむらうは按よ

奉寄進武州荏原郡大井郷鹿島宮鰯口  
寛正二年癸未十一月日掃松女敬白

鈴森八幡宮 同南の方繩を隔て十町あり不入斗村あり不入斗と

祭神中殿應神天皇 左殿仲哀天皇 總社盤井

神社とも稱せり別當ハ真言宗なりハ幡山密嚴院と号は

神主ハ森田氏なり

按は當社の延喜式に當國風土記殘編等に載る所謂磐井神社是なり  
後世に至り祭る所の神も定まらざるハ磐井は因る石清水正八幡宮を  
勸清せりあり

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六東二字

武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六東二字

田邊有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變之

其功驗如神土俗曰藥水云云 祈病者取之服之

代實錄云 冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使

斑幣於天神地祇去九月己丑無風雨之災誠有感

於歲以有年仍賽之武蔵國從五位下磐井神列

鈴石 當社はあり相傳ハ他の石を撃ハ其石鈴の音ありと當社

傳記に此靈石あり此地の名を鈴石森とハ後中畧してをのり

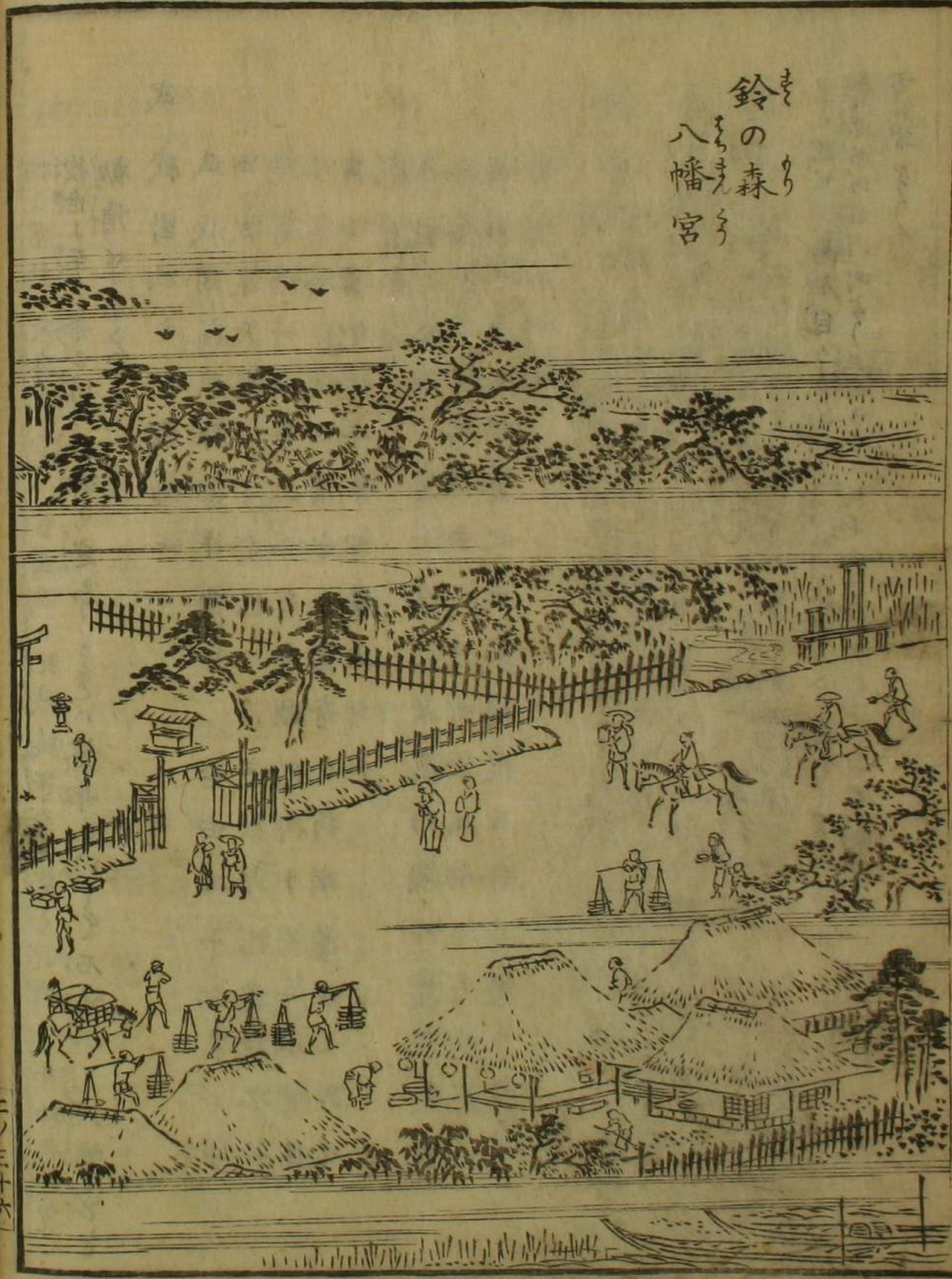
鳥石 社地の左の方より四五尺を越し石の中面は黒漆を以て畫り

鳥の形を頭ハせり石の左の角は南朝先皇の銘あり鳥石葛原是を鐫

舊麻布の古川町より三田の方へ移すの三辻にありと後此地へ遷すとあり

古篆なり





鈴の森宮  
八幡宮

匪<sup>一</sup>匪<sup>一</sup>星<sup>一</sup>昌<sup>一</sup>石<sup>一</sup>而<sup>一</sup>歸<sup>一</sup>不<sup>一</sup>黃<sup>一</sup>羅<sup>一</sup>昌<sup>一</sup>魯<sup>一</sup>陳<sup>一</sup>所<sup>一</sup>到<sup>一</sup>死<sup>一</sup>而<sup>一</sup>祠<sup>一</sup>出

額 鳥石 阿野公繩卿筆 鳥居額 鳥石祠 吉田二位兼隆卿筆

聯 龍紋の珠の玉島雨 梅小路三位參議定福卿

僊降蒼海於森風

中の一節なり

石華表 六七十河東の方今海面となり中音の項迄ハ石の鳥居の柱の礎は

俄の鳥居の項迄海面度は當社の境内あり一社地の中を往還の道路とせりと

社記曰往古神功皇后三韓征伐の時長門國豊浦の津より

伊舟よりされんと其海邊中て含珠の神石を得り則石青く

雞卵のや石中鈴の音あり鑄きたる故に鈴石と稱を異賊征

伐の後香推の宮小蔵多ひひ欽明天皇御宇八幡大神始て筑

前宇佐宮は鎮座の日靈示ありふあり此寶石を宇佐宮へ遷

させし其後聖武天皇御宇文章博士伊史大夫正二位文部

神祇伯勳十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たり

時ハ幡大神再ハ靈告あり依之此靈石を年足の家の移

崇信一々小嫡孫中宮大夫從四位中納言豊人卿桓武天皇の

延曆年中武藏守に任せし當國は下向一荏原郡に在せ

頃終に此地を封一々當社を徑營一神石を鎮座なる一

當社は是れ故に宮地を鈴石森と云其後清和天皇御宇貞觀

年間八幡宮宇佐宮より山城國石清水に鎮座在とき六十

餘州國毎に德社ハ幡宮を擇定賜み依る武藏國に於てハ

當社を以て德社とせし

笠島 鈴森の地を以て八幡宮の境内左の方ハ笠島神社と

稱するそのあれとも定あハ祭る神六前豊宇賀姫猿田彦

菊理姬天満宮淡島鹿島等なり奥州笠島の神と等き致

未これを考へて 草陰之荒蘭之埼乃笠島乎見乍可君之山道將越



秋の松花あわの松のまきとさゆり月ハさあけし

為家

磯馴松 鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前より

當社の神木と稱せ

荒蘭崎 同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも藻汐草に

荒蘭磯とあり 北条家の所領役帳に梶原日向守六郷内新井宿を領

此地も古の 海道なり 此とありて荒蘭を新井は作る今も此文字を用ゆ

續後撰

白波のあわの松花磯列松かきぬきの人をつれぬ

家長

夫木

沖津浪あわの松花磯列松かきぬきの人をつれぬ

今出川院 近衛

四國雜記

若くはさるあわの松花磯列松かきぬきの人をつれぬ

道與 准后

千五百番 沖津浪あわの松花磯列松かきぬきの人をつれぬ

沖津凡の舟の碇ふも松のうもいあまう人をあまき 信實

鏡懸松 ハ景坂よりあま往古ハ幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松ハ鏡を懸らるると云傳ふ高さ六七丈をいふ大と牛をかた

枝葉柳條のめく垂下る地を離るる其間三ツ四五尺ハ過せ

尤比類なき古松あり一ハ荒磯松磯馴松ともいひ或ハ震松とも

号く 枝葉共ハ動揺せしむ此地より望めハ海上眼下よりありて美

景の地なり 土俗ハ景を誤りて

八幡山行慶寺 大崎より東海寺裏の方戸越村より文祿元年

立浄土宗中々岡山念譽上人戸越八幡兼帯なる願成院と号し

梶原氏什室

戸越八幡 戸越村鎮守なり天文年間鎮座ありとの御正躰を

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社



やまの  
八景坂  
鑑掛松



境内のこいし小石とたうらう庖瘡の寺とをれいけん靈験ありとて土人是を拾ひ取とらく  
 歸かへる九月廿八日相撲あり  
えん分限帳太田新六郎所領の中  
ろく六郷内戸越ハ梶原分云々

木原山 同後の丘山とつり木原氏の領地なり  
そせん祖先を伊豫の河野の一族とのいふを誤り

木原氏の系圖を歴觀せ云々木原氏姓ハ德積祖先を鈴木掃部介吉行といふ  
 四代の後同苗平兵衛吉頼 御當家ト仕へり速州山名郡木原村五貫文の  
 地を賜り其子と七郎兵衛吉次と号し其米邑木原ト往り普請方と勤む  
 然ハ天正三年二月十八日 台命あり在名とつり鈴木氏を改め木原と号す  
 桐十八年江戶城入の時武州荏原郡 此山頂ハ上古の相模街道と云々  
 新井宿村とて四百四十石と云々

荒蕪宿とつり地なりとて古奇トありぬの崎ハ並毛と云々  
 又池の中島ト辨財天の叢祠なりとあり  
このみや此宮を土民小野村  
の宮なりといふ其地

醫福山桃雲寺 同所山際トあり徳門ハ東向中々海ト相對す  
此寺龍崖下の耕田背ハ海ト此崖下逆浪を打寄

眺望八景坂ト同一  
たりしとあり其頂ハ上の道を往來せしなり  
 當寺ハ曹洞派の禪林と云々中古此地の領主木原氏の祖  
木原十郎

戸越八幡  
 行慶寺



慶長十五年庚戌 桃雲浄見居士中興せし境内に墳墓あり

極月十一日卒 所記ハ林羅山先生撰

福田山蓮花寺 蓮沼村にあり 此地ハ六郷に属す永禄二年の頃雅田真言

宗の古刹なり 荏原郡の地頭荏原兵部有治と云一人出家と 蓮沼坊と號し當寺を創立す本寺十一面觀世音菩薩の

像ハ行基大士の作なり 往古ハ巍々たり 巨藍ありしが地頭

行方彈正忠日蓮の弘法を崇信し他宗の寺院を滅却す

行方彈正の宅地ハ六郷 其頃當寺も焼亡す堂塔悉く灰燼と成り

八幡塚の辺に同奉次を祀り 其形を存せり 此争亂の時當寺

遷せしなり今本門寺に 存せしもの是なり

按東鑑兼久三年六月十四日宇治川戰死の人の中荏原弥三郎同六郎 六郎又嘉禎四年二月十七日將軍入浴供奉の人の中荏原七郎三郎 貞政と云名を註せり同奉次の中延八幡宮の条下も荏原左衛門尉義宗 其子有成なりと云人の名あり何れも此地より出づる人なり同氏族の

葦原

女塚 女塚村農民太左衛門の地にあり相傳往昔竹澤右京亮新田

義興を害せん為都より官方の御所の少將殿と申上臈の女房

年十六七計なる美女を呼下し義興を害す又其後九月十三夜

義興を己の宅に迎へんと謀し小彼女凶兆ありとて是を

因り竹澤其事此なるを怒り良等も余一件の女を此所迄

透し半殺害せし故に土民あはれとて亡骸を隠し一堆の塚を

築りてとてこれとも其名のあはれとて女塚との唱へ來侍

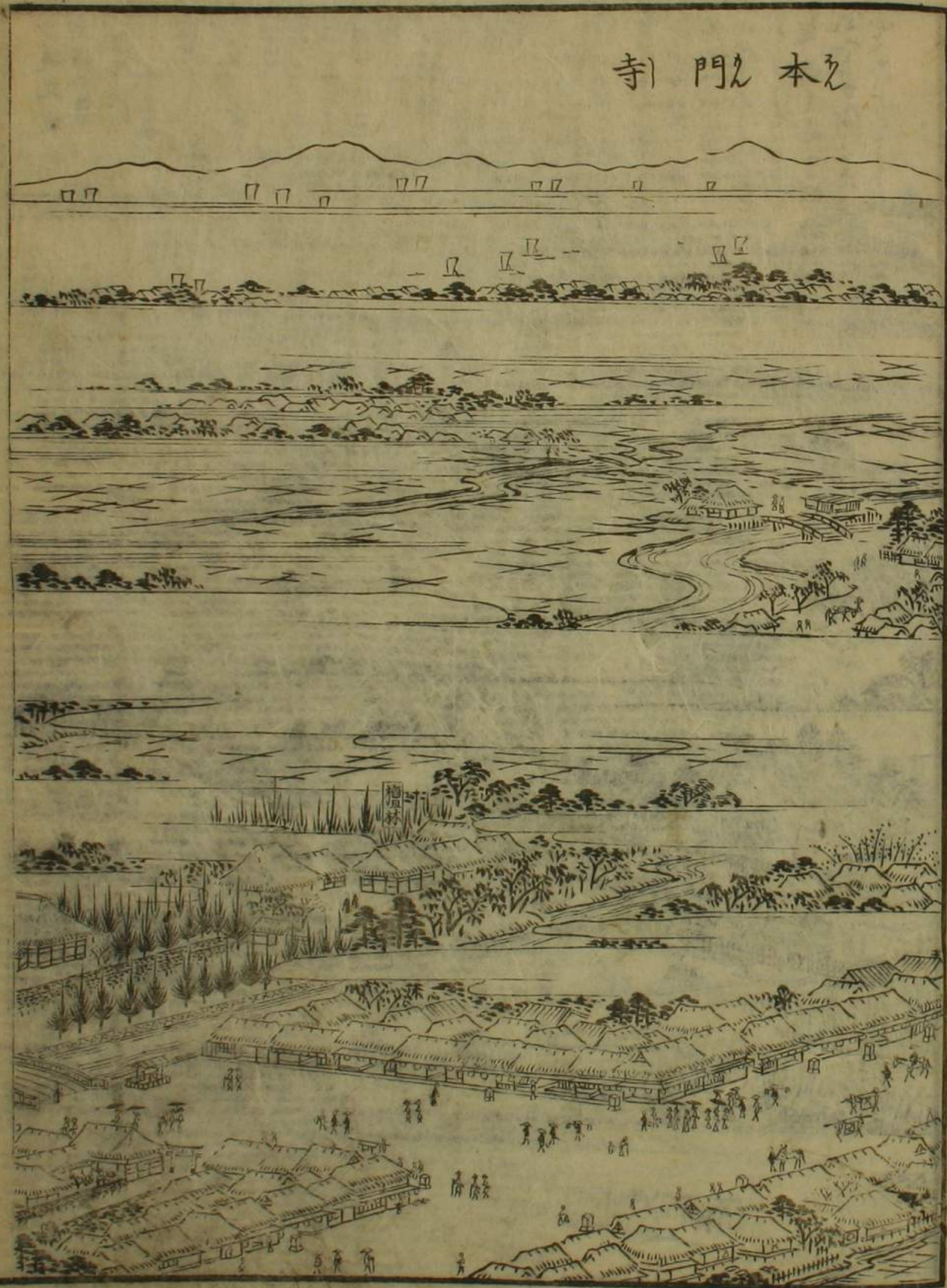
長榮山本門寺 大國院と号し池上邑にあり日蓮大士弘法の

一本寺なり三頭と稱す此一員あり 甲州身延山總州正中山

當寺日蓮大士終焉の古跡なり弘安年間の開創なり 佛の出世

小湊より得道ハ龍燈あり法論ハ身延に入り涅槃ハ池上なり云 則宗祖

寺門本



大士を以て開山祖とて文保元年丁巳六老僧弟二位日朗上人  
 當寺を修造して大刹とせしむる於て諸門徒推して開基と稱す  
 日朗上人ハ筑後公正法院大國阿闍梨と云姓ハ源父ハ新羅三郎義光の子南総  
 平賀の住人又郎盛義四世の孫平賀有國の子なり十歳中より出家文永八年大士  
 後平賀の口土軍一筆り同九年佐州に至り私安元年上足の第二となる文保  
 二年北條時宗の命を受日朗と共ニ諸宗の徒と法義を論じ利あり元應元年  
 二月廿日池上ニ寂せ世壽七十八卯花圖漫録云玄開の弟昔ハ下駄草履  
 禪宗の古風ノ趣ありと云  
 祖師堂 忍鹿子室永七年寅十月十三日炎上せしと云云徳三年渡迎幸庵老人對話  
 右馬頭顯季一揆を起すの時此本門寺諸堂 日蓮大士像 弘安五年十月十三日  
 田録及及りしと云日朗上人再建す 大士化寂の後七  
 宗祖大士の本像ハ大士存在の日日法上人彫刻ありしと云又和漢三才圖會ニ當寺  
 額 祖師堂 太虚庵光悦筆 釋迦堂 當山第二十五世日朗上人の  
 本像 釋迦如来の四菩薩の額 釋王殿 伏見親王真跡 轉輪藏  
 像ハ共ニ運慶の作なりといふ 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同樓門の左ニ並  
 祖師堂の後ニあり 鐘樓 左ニあり 題目堂の 首題を唱へて常ニ法華  
 一切經を安置す 妙見堂 樓門 石階の上ニあり下の左右ニ金剛蜜迹の二像を置  
 鬼子母神 妙見堂 樓門 行基菩薩の作なりといふ古川兼師より述せし



其二



身延記行  
万治二年

深草隱士  
元政法師

予のこれ二日先  
よりて此上へ  
行てこころ  
志のうまはた  
あつてはて  
あつてはて  
ぬれぬれ  
をこころ  
をこころ

人世以智音追師斯再尋  
今宵池上月 依舊照天心

予のこころ  
肉つきの  
肉つきの  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて

あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて  
あつてはて





三其





額 長榮山 光悦筆 五層塔 七面堂 宝蔵

檀所 南谷あり此後南谷檀林と云ひて 日蓮大士茶毗所 同所の山際あり

狩野探幽法印の墓碑 同所あり 狩野家歴世の墓碑

日蓮大士終焉日跡 本堂あり西の方あり 大士入寂の後宗仲居士を

九老僧日澄上人の附屬 夫志宗仲の宅あり 日蓮大士鏡師影堂を

私安五年九月宗祖大士宗仲の宅あり 寂し臨み頃如是未曾有の大導師

我家入多ゆ誠一盲龜の浮木あり 似たりとく一度かより一入一度ハ別離の

終に託く自姿を鏡より影を遺さむを求む上人夫婦の深信黙止とく

林同臨滅度時菴柱 影堂の拜殿あり 大士宗仲の宅あり 寂を

硯井 洞庭前絶壁の下あり 冷泉中々甘美あり 柱かりや

講一畢我臨終の期既三十七日の中あり 佛像経卷等を門弟子に

祖師一代の妙符の秘記を授け 旅立寺影 同所あり 安五年壬午九月八日此山

六老僧等は後へ其項宗仲の像を造立せんとす 宗祖日蓮大士石塔 右の方

頂山の法師上人其項宗仲の像を造立せんとす 宗祖日蓮大士石塔 左の方

池上右傍門太夫志宗仲墳墓 同所あり 碑面は朗賢院日宗聖人

六年癸未九月十三日とあり同一傍に妻女の墳も並ひ立と法号八日明上人檢  
所なりとあり  
此上右傍に大夫宗仲の墓あり  
我聞宗尊親王の墓あり  
元年丙辰八月鎌倉の宗仲の墓あり  
宗化の墓あり  
重徹の墓あり

坊舎三十六字  
坊舎ハ九老僧日澄上人へ附屬あり南坊ハ六老僧日昭上人  
當寺古蹟の四院あり  
惣門石階の下額本門寺光悦筆

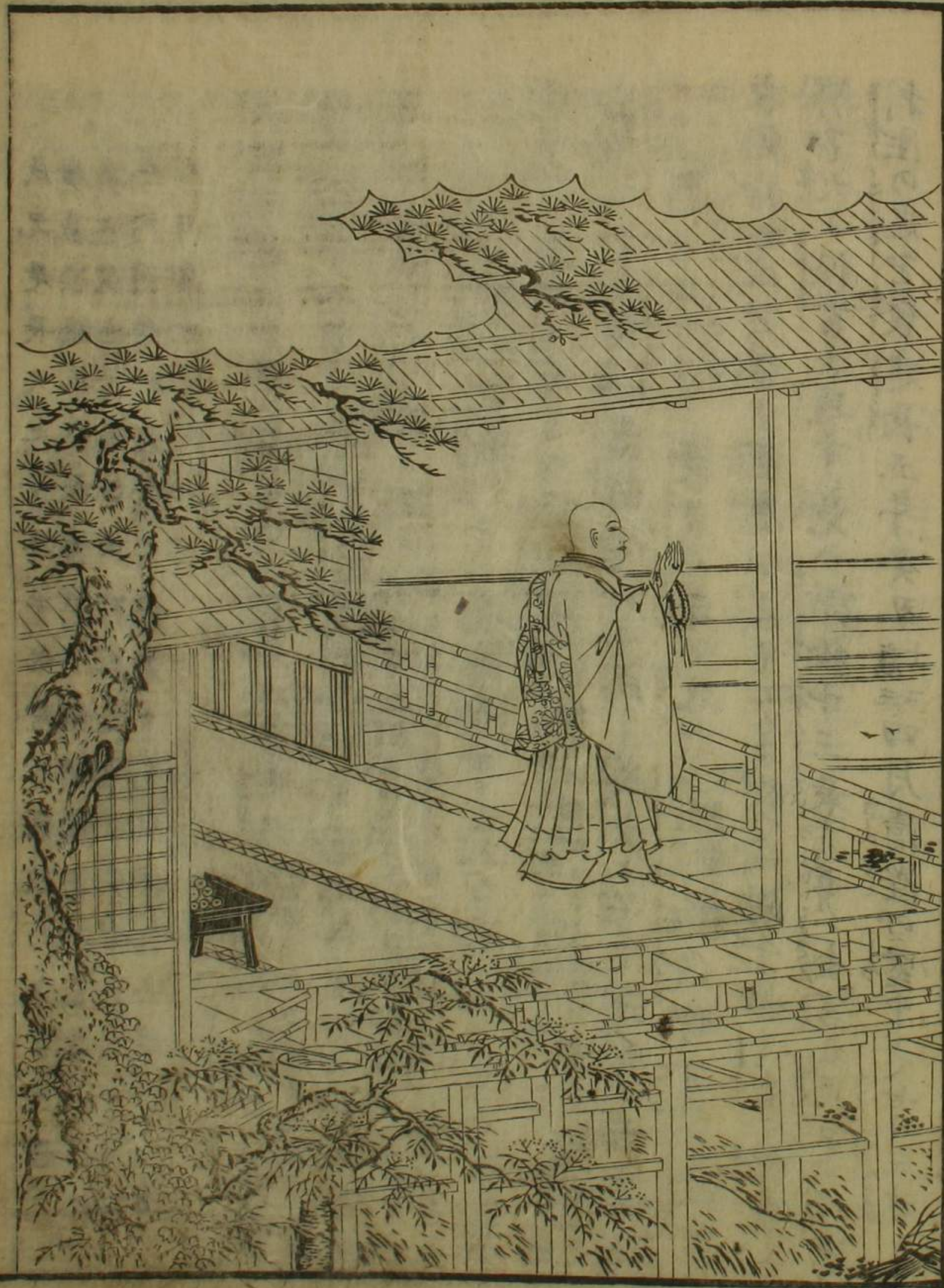
寺寶註法華經四卷  
宗祖日蓮大士遺物目錄簿一冊  
宗祖大士親筆消息數通同大士所持念珠一連肉付

齒骨一枚  
宗祖大士親筆消息數通同大士所持念珠一連肉付

真宗太刀一振  
對面たるまじり  
紫石  
靈鷲山

修勸化簿一冊  
深草元政法師是を撰  
紫石  
靈鷲山

禍政諭教福人即登人依夫花輪樹興祖國眞蓋池  
点之諸人最修身可則獨法木與之廢大王諦聞  
為施寺言勝一成一本在依寂四風屢薩大由時  
荒莫造宜也寺佛日地住人冥海烟變柱臣俗運  
政此伽修諸自其付久處興獨不既方草及諦長寺  
之為藍故經莊居諸成況人啻屬今創之力佛佛識  
施大意寺之嚴則荒之乎依花修寥祇園名之法刹文  
然夫欲以中我常蕪人我處是故落而七藍人籍隨  
則修發獲往報寂哉所之住豈能今重之淫有法世興  
凶故有災々地土吾法妙也法處不唯長構之也矣荒  
年寺餘禍稱也之耳直法故為人乃雖足有久之就地  
歲伽財又昔佛觀此為貴靈如甬有猶佛微星霜寺法廢  
益藍以茫神言此妙貴靈如甬有猶佛微星霜寺法廢  
宜其惠文僧造士妙貴靈如甬有猶佛微星霜寺法廢  
修福貧者公遇當如修是箇處之其乎遇僧林交者高  
以唯故遇當如修是箇處之其乎遇僧林交者高  
救攘云荒歲年故若々尊法所蓋春藍斐遷高  
斯災荒歲年故若々尊法所蓋春藍斐遷高



建長五年四月廿日  
明蓮上人房州清淨寺  
向ひ初  
題目七字と唱へ  
多八本文不えそり

民況是長久之世昇平之時乎因茲乃今普叩檀門  
廣募樂施正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠  
萬方致志一振鶴樹寥落重興祇林衰微人々入此  
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清涼  
之日者也

宗祖日蓮大士姓八藤原父八貫名次郎重忠始三國氏と重忠八遠州刺史貫名五郎重實の二男なり

母八清原氏あり一は富山の氏族とも山崎貞應元年壬午二月十六日

房州長狹郡小湊よ生る其母常又旭日を拜む或夜日輪觀華を乘し其胎を託すと夢く後孕む故よ善時磨と名づく

創立を所謂小湊の誕生寺とす十二歳清澄寺に入て真言の業と道善小

學び名を藥王磨と云宗要抄天福元年癸巳五月十二日初て寺に入とあり清

嘉禎三年丁酉六落飾漆衣受戒一蓮長と号し是生と唱ふ道善

所の名あり宗要抄十月後後自日蓮と改む又靈夢の應或時虚空藏此

求聞持の法を修し靈應を感む或於て一聞千悟一普く諸宗よ

濟す大に徑書よ通す竟小諸徑中王最為第一金言よ至る大道

利生の志を發建長五年癸丑十歲三四月清澄の室中て七日三昧よ

入同廿八日旭日よ對ひ掌を合せ始く法華題目の七字を唱ふ此

化迹日弘法の故よ道善愈て清澄を逐ふ同五月或四月相州松葉谷

權輿なり後後住之同七年乙卯十四註法華經を著し正嘉戊午駿州若本

又文應元年庚申十九立正安國論を編後後認よ云く

七月十六日宿屋左衛門光則よ就て是を前相州平

時頼よ捧く然といつとも其書諸宗を誇り憍慢の文あるとめて

是をとくを却て大士をして豆州伊東よ謫せしむ時よ弘長元年

辛酉五月十二日なり此先文應年中総州よ遷ひたす富木氏一堂をのこり

同二年壬戌早時頼悵然として感む所あるを以て翌年

癸亥五月廿二日牒を下し大士を救を依て復鎌倉よ歸る甲子歲四

十三八月大士房州よ下向母公妙蓮尼同十月三日死師妙新誓あり

同十月十日同國小松原よ移る東衛左衛門平景信大士の他を思ひ

小松原をかこむ大士よけり市坂の窟中よ入又同六年己巳文永八年辛未早大士

手書の妙法一本を富士の巖の半腹よ埋む今徑の奉と云是なり

鎌倉靈山崎よ至る雨を淋らるる題目をとく官議して云く日蓮事を佛

經文を為板よ表して海よ投を果して感應あり

法よ托して國家を乱さんと罪まらふ死に中まりと依り同年  
九月十二日執權時宗頼綱は數百の兵士を添く松葉谷小發向せしめ  
大士をわめ捕り又日朗等まら六人の輩を地牢に入其夜龍口は於て  
大士の頸を刎んとせしめ  
此老嫗は稻荷の神化せるなりと云 靈威あるを以て執權時宗大は驚死を宥め  
佐州に謫せしめ  
又同十三日本間重連は依智の家に至り其夜辰星庭前の梅樹の上は降る光を  
越つ其靈と旗を星梅山妙典寺と云同十月二十八日佐州松崎は着船あり其海上  
角田の水面より高祖掉をわたりし経題を畫しめ又文字の象波間は微く自ら龍  
蛇を動するの勢ありて呼んで波の題目とり又同年十月朔日大士佐州大野の  
藤原の祠堂に入り奥羽の僧等と大に問答せしめ  
十六日信越を以て奥羽の僧等と大に問答せしめ 同十一年甲戌 十三再ハ靈威は  
ありありと遠く執權時宗大士を赦せ依り三月二十六日鎌倉に入  
り  
同五月十二日甲州身延山に隱栖せんと鎌倉を發し同十七日かこふ  
移り草庵に入らふ  
其先同年五月二日王府より獲法の牒を下し多し又其項  
大石和川ありて徑石を水底に投し鶉餉の鬼を化せ  
其地幽邃なりとて四方歡ひ慕ひく來り集る者雲の如し

故に其室狹くく衆を容るるありあつて依り一堂を建て身延  
山久遠寺と云誦經觀念十年一日の如し  
其項七面の神一女と化し來り  
如道を守護せんを誓ふ  
弘安五年壬午宗祖齡六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありとて  
同九月八日身延澤を去り同十八日此池上の地に移り右衛門大夫  
宗仲の宅に入  
宗仲は家と稱し  
寺を今の太坊と稱す 同廿五日より安國論を講しめ  
講畢るの後衆は告て云く吾三七日の中は化せんを悉達太子を  
提提河の辺わく八十歳の時涅槃に入らむ我も又當國田波河の辺  
わく滅せし若地震せば是其期ありとあつて又日朗は語て曰く  
吾入滅の後墓所は必身延山に築へしと云嘗て十月三日親ら  
本迹大要を書し立像佛  
弘長元年大士豆州論居の頃和房室より  
君の項は東八郎左衛門尉朝高太士より  
附屬する所の立像の釋迦なり世に隨身佛と稱せし此を安國論官牒二本を  
海中より出現のり附屬書注釋し詳あり今浴の本國精舎あり 安國論官牒二本を  
併せし日朗は授与あり  
官牒二通の状と同年五月二日護法の状とをいふありん  
赦免の状と同年五月二日護法の状とをいふありん  
同八日上行附屬の法門を弘めん為り六萬恒沙の眷屬は像り正しく

上足六人を定めて所謂時日向日興且衆は命して云く吾没  
後六子を見らる猶吾を見らる諸子問訊を  
遺訓傳々然り既中侍者自ら筆を所の大曼荼  
羅を懸しめ焚香散花持誦愈つ十三日黎明地震諸  
弟子皆来り集ふ大士衆と供ふ方便品を誦入佛知見道故の  
句に至り睡りゆく寂を示し或人云く壽量品の半に至り本門寺  
世壽六十一法臘四十六華儀禮は遵其田地中山中閣維を林樹變衰  
しく人を鶴林の想あり同十六日又十一月遺骨を収め身延  
山に送ると云以上宗祖傳の要を採り記す  
千束池 本門寺の西一里余を隔てあり長東西へ三丁をわき中南  
北へ五十歩をわきあり土人云往古此池は毒蛇住り後七面を祭る  
とのみ又池の側は日蓮上人の腰を懸ひいと称する古松一株  
あり

中延八幡宮 中延邑に在る故に号とせ別當八日蓮宗にて八幡山  
法蓮寺と云崩山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相傳ふ當社の  
神像ハ源頼信朝臣寛仁年間靈夢よめり感得ありと云  
長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義  
朝臣陣中より移り敵を亡しめ其後永承六年奥州安部頼良  
乱を發し又清原武衡家衡反逆の時も共頼義朝臣義家朝臣  
鎮守府將軍とて奥州へ發向し亡しめ此御神の衛護よ  
ある所なり崇信浅くは累世源家は相傳を姓ハ源朝臣則幡太郎代々此地を  
主荏原左衛門尉義宗と云人あり義家朝臣の遠裔也  
祿を依て中延を氏とす又此所は館せり康元元年丙辰鎌倉に於て  
日蓮大士の宗化を聽直は檀越とあり其家は此神像を蔵む嘗  
靈夢を感するの後文永年間日蓮大士を請し法華經に  
法味を以て一社を勸請しなり日記を作して其子左衛門尉





千束池  
架袋掛松



法蓮寺



中延八幡宮



有成次男德次郎徳次郎と与ふ徳次郎正慶元年正慶元年甲子二月二十九日甲子正慶元年正慶元年甲子二月二十九日甲子正慶元年正慶元年甲子二月二十九日甲子

寺寶頼義朝臣議状義家朝臣八幡宮の神像と八幡宮荏原左衛門尉荏原

議状一通神像越中阿闍梨越中阿闍梨八幡宮の神像と八幡宮荏原左衛門尉荏原

慈眼山萬福寺馬込村あり曹洞派の禪林馬込村あり曹洞派の禪林馬込村あり曹洞派の禪林馬込村

寺は属を本尊自然銅弥陀觀音勢至一光三尊自然銅弥陀觀音勢至一光三尊自然銅

牌并墳墓あり右一尺相傳ふ當寺相傳ふ當寺相傳ふ當寺相傳ふ當寺相傳ふ

按靈牌の表萬福寺殿前三州大守香山萬福寺殿前三州大守香山萬福寺殿前三州大守香山萬福寺

寺寶布袋鞍梶原氏所持の角梶原氏所持の角梶原氏所持の角梶原氏所持の角梶原氏

陣貝右大梶原朝右大梶原朝右大梶原朝右大梶原朝右大

梶原氏肖像面影勇猛面影勇猛面影勇猛面影勇猛面影

馬込八幡宮同所あり三河守同所あり三河守同所あり三河守同所あり三河守同所

梶原氏宅地同所通るを隔て同所通るを隔て同所通るを隔て同所通るを隔て同所

景時の館是れ三河守是れ三河守是れ三河守是れ三河守是れ

鳳来寺峯の薬師峯の薬師峯の薬師峯の薬師峯の

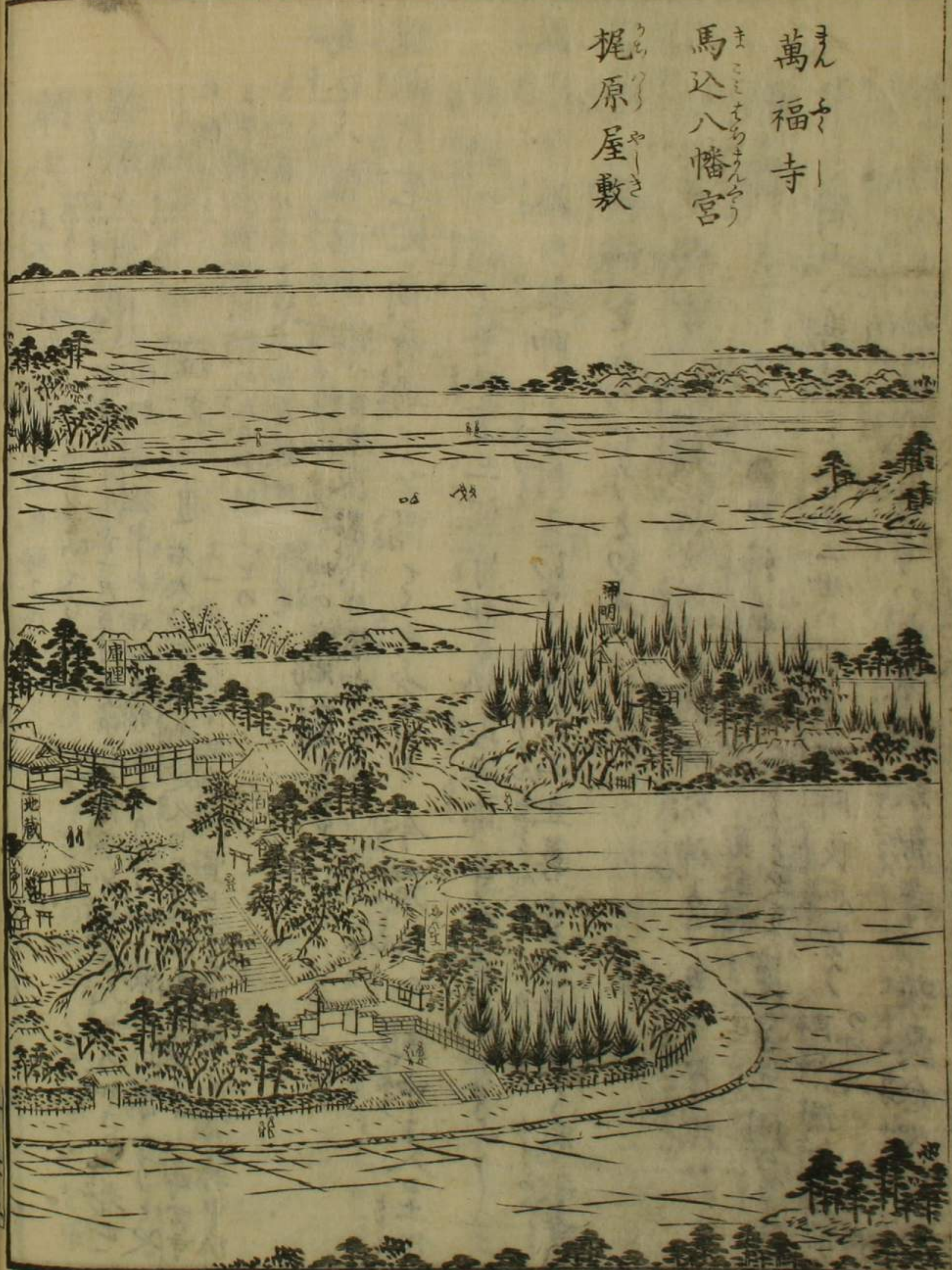
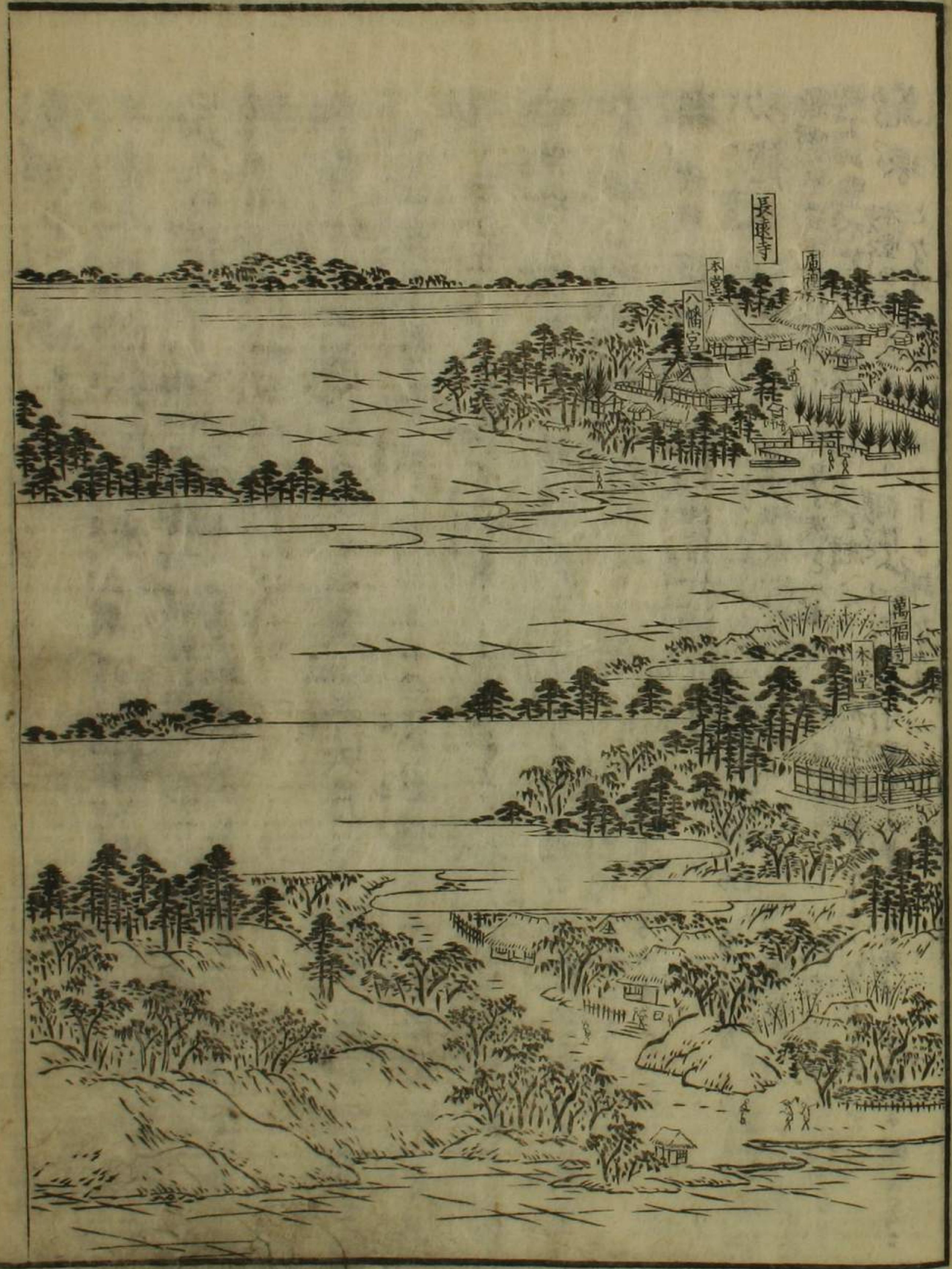
大金山光明寺宝幢院と号宝幢院と号宝幢院と号宝幢院と号宝幢院

鶺鴒木村西山派西山派西山派西山派西

寛喜年間寛喜年間の草創寛喜年間の草創寛喜年間の草創寛喜年間の草創寛喜

仁治の間四箇年當寺仁治の間四箇年當寺仁治の間四箇年當寺仁治の間四箇年當寺仁治

當寺關東淨教當寺淨教當寺淨教當寺淨教當寺



萬福寺  
馬込八幡宮  
梶原屋敷

最初の道場

本堂本尊阿弥陀如来立像三尺山城國八幡村に住する康尚と

ひの人の作なり康尚ハ美濃守康信とひの人の一子にして八幡大菩薩の本現あり

額 大宝王 弘法大師真跡あり

本尊縁起云開山上人五十三歳此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ

一七日の間叅籠あり然り同十五日の夜社檀は僧形の弥陀如来出

現しひ上人へ十念を相兼しひぬ上人歡喜ありて翌朝下向の

時社外に至りしは異僧傍にいありて上人は弥陀の像を附与

あり依て武州鶴岡村へ迂し系す此時光明を放ちぬ故と云

額 光明寶林 縁山大僧正満空筆

功德水同本堂の前左の方の井のどしハ幡鎮座の靈地ハ必名水あり當寺の鎮守

靈像當寺の秘寶と仰せし者然とハ本堂一敷敷也功徳池 弥陀の心水なり

荒塚本堂の前左の方あり相傳ハ江ノ速江守雷火に撃れて死せしと云

觀音堂

同境内堂の右あり縁起云善惠上人津國四天王寺の聖靈院あり

善惠上人宇都宮實信坊は命じて此本堂を當寺より遷し寺外に宇都草

堂を構營しは安置を北朝の延文四年新田左兵衛義興作澤右京亮あり

遠江守ハの謀計は降入り矢口の渡の船中舟にて一族良等と共に水中に溺死を

かこく義興怒て火雷神となり作澤江戶一族を悉く撃殺を殊に矢口の渡ハ奮怒

の跡なると雷火墮るる屢あり寺院民屋も悉く燒せし淨心ととり其項の像の

異を免さんふを此本堂に祈念し雷火の難を遣ふの奇特を蒙るる其項の像の

所托の由を傳ふる今も然

故は土俗雷留觀音と稱す

當麻曼茶羅本堂の後の壁の上は糊を西山上人像に數敷の曼茶羅を圖繪し

寺は有と弟ニとせと酉譽上人曼茶羅鈔此曼茶羅の圖中中品下生の蓮華青

蓮華となり三草計生あるあり人々奇異の思ひを起し道に諦ひ來り是を拜を

承不淨の如く彼蓮華は手を疊れらるハ其華萎枯ると今も残る中品下生の

蓮華の損るる形ありと記せり

善導大師影像昔善導大師自木像二軀を作を海に投して云く有縁の地は

置を今猶存せり脚頸ハ此地也

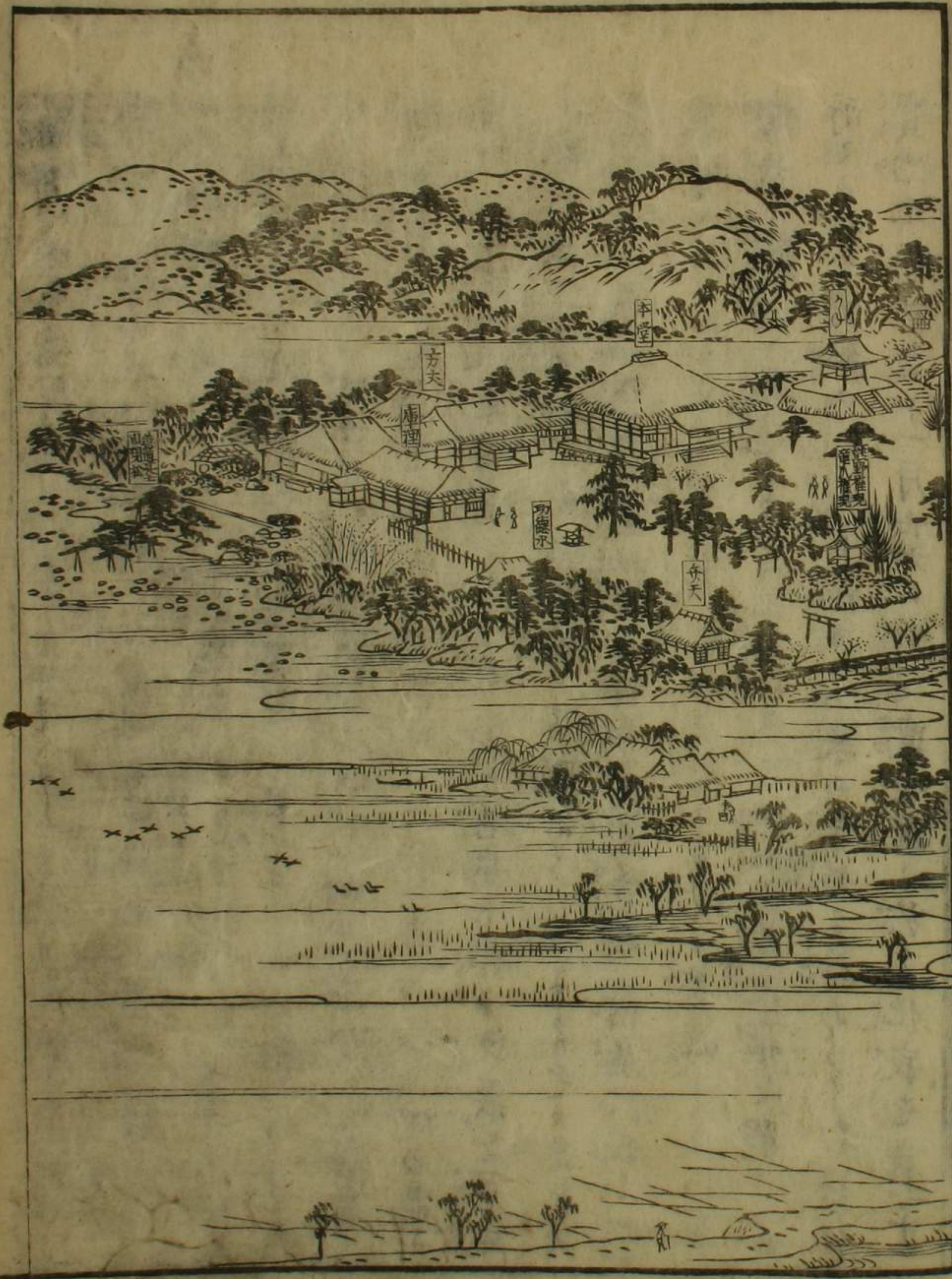
扇一柄善惠上人より宇都宮實信坊と与へられ扇なり天福元年善惠上人歳五十

下るる然り上人實信ののののハ興州に至る白川の淵を敷りて

ありされと白川の淵を過るる実信坊ハ上人ハ告るるをりし

魁の心を詠し一首の和奇を持しる所ハ書あり実信坊ハあこ

光基不



光明寺



此詠解... 古く云... 住せ... 記

開山善慧上人 初解脫 諱ハ證空俗姓ハ源氏天曆聖主の皇胤

加州刺史親季の子なり 證空と云ハ父親季の法名證玄と 治承元年丁

酉十一月九日誕生久我内大臣通親公養て子とを幼齡より菩提

心に住し故に吉水上人 源空の許に投て十四歳薙髮して善恵と

号を性俊逸中て一を聞て千悟に建久九年の春月輪殿下の請よ

よの源空上人選擇集を著し其時善恵と偕ふ文義を考定

も或時殿下云く師の滅後此書不審あは誰よりて是と決

せん師云く浄土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附属に我も異

なり守とてこふかひく殿下善恵を崇信し其厚く上人都

鄙共は伽藍を建立し其の一十二區又浄土の曼陀羅を圖し

所は収め佛經の印板を削き未來の學者に益あらしむ終に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院に於て化寂を歳七十二

西山善峯寺に居し盛に宗教を弘通あり故に世に西山人

と稱し其の行狀ハ上人傳に詳なり 浄宗西山派の太祖と稱す

當寺往古ハ大伽藍中々關東の高野山と稱し衆人先亡葬に逆

修等の石塔婆を建參詣の人も多かりし故に今も古き

石碑石佛の類ハ此所彼所ハ存在せり 寺の大門あり六丁東の方あり

不浄の時ハ崇ありとて田畠耕作 護摩堂屋敷と號する地あり

光明寺池 光明寺の南に添ふ往古の矢口は川筋ありしなり今ハ

水流替りて南の方へ寄て流る池の長さ東西貳百余間幅ハ南北へ

五十間をかりもありと云はば 里老傳云記王禪師當寺に住職たりし時

新田大明神社 光明寺より五丁南の方矢口邑にあり別當ハ古義の

真言宗小く真福寺と号し高畑宝幢院に属を祭る所の神ハ

新田左兵衛佐義與朝臣の靈あり十日を縁日とて拜殿の邊を經營せ



新田明神社  
真福寺





本社の地ハ古廟なり則其田瑞籬を造り設く中ハ一堆の塚  
 中ハ蒼樹繁茂也此地ハ昔の奥州海道中ハ古廟後の耕田の地也  
 沿と称せ長凡三百間半横四十間或ハ三十間程ありといふ土俗の  
 言ハ流石なり今ハ水田なり

古廟碑 社前左の方ハ建ちて向ふと云今ハ社の於へ向ふ  
 社前あり至ての老樹あり  
 竹衆澤密止進國與山鑣帝將王北肯矢  
 澤難來請神之清竹以倉密公南分元口  
 預襲神島君不寵得若澤幕令御度朝弘新  
 與使君山不出既再隙士東國子名義左各  
 舟分納使江竹而事逐之澤山將興勇將其  
 人士焉戶澤請舊君竹嘗國復張氣掩公戰  
 謀卒於氏不餐己願澤事清爲副是足延文  
 竅先是三二克果家有所謂神君使共利氏  
 舟神比助焉亦君害神曰圖之次使以族  
 而君至比助焉亦君害神曰圖之次使以族  
 塞至比助焉亦君害神曰圖之次使以族  
 之夫事焉亦君害神曰圖之次使以族  
 使口焉亦君害神曰圖之次使以族  
 于從襲逐不美納焉無乃罪陰共患基氏  
 岸着錄之猜人乃有夢飾見疑謀之畠居  
 既十倉且人因乃又懼女於伴畠居南  
 神耳有竹又懼女於伴畠居南

與其人乘焉中流舟人伴失墜船具於水没而求之  
 陰去其塞永而逃水不可入舟將沈竹澤江夾岸伏  
 噪而出神君而悟既不可入舟將沈竹澤江夾岸伏  
 屠其脇腹而沒十人見死焉後害者至津雷電晦  
 冥神君介而今四皆死厲人見不懼乃爲立廟追  
 祀其神至今守山餘人賴寬遣使立碑自書篆額乃  
 年寬保甲子守山餘人賴寬遣使立碑自書篆額乃  
 又使元喬據舊史釵其源勒石係以迎送辭其辭曰  
 霹靂激兮電揚光龍車驚兮玄雲翔神之至兮欲亡  
 常儼如在兮水中央被犀甲兮張彫弓既一怒兮奮  
 鬼雄仇且殪兮懟未窮將以儼兮茲壽宮蒸有醴兮  
 米蘭蕙潔余祀兮神無儻兮毅兮勇以厲掃妖氣  
 兮永替水澹兮清以河往又來兮羗可濟良辰  
 和兮天門霽顧余降兮雲之際  
 延享三年春三月守山源賴寬篆平安服元喬撰  
 烏石葛辰書

新田左兵衛佐義興書簡一通

先度以內書此仰出々々丁寧申通所奉色異  
 于他の如く仍爲感心使一及治了可補下  
 於此下知の内面目之九州之候亦申此忠告

修後お後、うゐる要の程、あ細き花三夜寺本  
賞可令侍達、路のち、洋き

十月十一日

波多紀若さるゝ

義興判

其の兵器古陶器の類ひ寺室にこりこりく是を略せ  
太平記云 新田左兵衛佐義興ハ 義貞の妾服の子、上野國小居よりし  
家志あるむ、一上野の兵と此義興と大将を取立三万余騎あり共鎌倉を責落  
吉野へあり、先帝感あり、義貞の家と興とつき器なりとて、項童  
名を徳壽丸と申せし、元服せし、新田左兵衛佐義興と召れ、器量人、勝  
智謀衆は秀々れ、公平七年む、野合戦あり、鎌倉の軍、大敵を破り、卒  
當り古今、父左中将戦死の後、越後國あり、武藏下野の國  
獨歩たり、中々、新田家は志を寄る輩、竊に音信を通し、れ、兩國の間は  
其勢漸く萌せり、然る此、鎌倉へ聞え、れ、管領足利左馬頭基氏  
畠山太夫入道道誓大に驚き、義興の所在を尋く、度、勢を向ると  
いとも義興事とせ、はく、打破し、千變万化、まゝく人の態、あはれ

故、是をそくあ、道誓潜、竹澤右京亮と謀、竹澤を義興  
小下り、め夫あり、後種々の毒計を用ひ、義興を討んとせ、れとも未時  
至らむ、竹澤右京亮は旧義興む、野合戦の項、其は、忠あり、れとも  
竟、美女をそく、心と、か、無二の味方と思はる、迫あり、うハ  
竹澤偽、鎌倉を亡さん、謀を運り、大に義興をま、り、うハ義興  
其意、隨ひ延文三年十月十日の曉、主、後僅に十三人忍んで、こ、れ、を  
發向を既、矢口の渡、り、小至、船、乗、竹澤先、小謀を、ま、り、く、故、に  
渡守、謬、て、櫓、楫、を、取、落、し、是、を、採、ん、と、の、ひ、偽、く、水、中、小、入、兼、く、鑿  
置、り、一、船、底、なる、二、川、の、穴、を、塞、し、水、を、枝、れ、ハ、河、水、注、き、入、り、其  
船、沈、む、と、も、時、向、の、岸、なる、江戸、遠、江、守、り、伏、兵、河、辺、に、起、り、両、を、ひ、く  
ろ、小、於、く、義、興、初、其、謀、を、察、し、大、に、忿、て、自、ら、腹、搔、切、て、と、失、ふ、ハ、井  
彈、正、も、續、ひ、く、自、殺、し、其、余、世、良、田、右、馬、助、大、島、周、防、守、あ、り、ハ、由、良  
兵庫、助、同、新、左、衛、門、尉、等、ハ、引、組、て、差、違、ひ、又、ハ、互、に、首、を、搔、落、し



やんちのこ  
矢口古事

て死す。土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ  
水底を潜り向ふの岸に夕上り敵三百騎よこりあひ終  
主後十三人太平記の書に討死の人主後十三人とあれと義典を共討死を  
始とす九人の名を注せり其餘四人の名あるべし共討死を  
其後竹澤及び江戸の両士等こりこり其首級を尋出し入間河  
なる基氏の陣へ馳参し實驗に入ると其後同十月廿三日遠江守ハ  
今度賜る恩賞の地へ下らむと日暮及ひ矢口の渡に於て  
雷頻りに鳴震きそれハ懼む馬を走せしある辻堂に入らんとす  
此辻堂と云ハ鶴木光明寺觀音堂のありとす折々黒雲一む江戸頭の上は落下す雷  
電耳の邊に鳴閃をきられ餘り怖く後を吃と顧みず義典  
火絨の鎧は龍頭の五枚甲の緒を縮く白栗毛なる馬の額に角比  
生たる小乗鞭を打ち遠江守を弓手の物に好し燈の鼻は落  
下りて七寸計なる馬俣をくわし乳の下へかけぬ  
と射通すとと思ひく馬より倒れ落ちて悶絶しを後者共典

乗せく家へ歸り七日の間水は溺る真似をしを死する  
又翌の夜畠山入道の夢に新田義典長二丈をくわし鬼とあり牛頭  
馬頭阿防羅刹共十餘人を前後に随へ火車を引く左馬頭の  
陣中へ入ると其日雷火はかき入間河の在家三百餘軒  
堂舎佛閣數十箇所一時は灰燼となり是のち矢口の  
渡に夜に光物多く往来の人を悩し種々の祟ありこれハ土氏是を  
怖れあひて義典の靈を二社奉祀新田大明神と崇ると云以上太平記  
の野を摘む  
十騎社同所道を隔て向ふあり新田左兵衛佐義典の家臣十人の  
靈を祀る此所も拜殿のち本社ハ一堆の荒塚のちり土氏  
登与頼明神と称し事實は先  
十騎とハ所謂 井彈正忠 大島周防守 南瀬口六郎  
由良兵庫助 同新左衛門 世良田右馬助 市川五郎  
土肥三郎左衛門 以上八人の名が平記にあり其餘の人名今考へ  
然る異本は松田と市河道隆七塚壹政権守進藤孫六左衛門等の名あり  
日本武尊祠 傍にあり 攝社とを相傳ふ此所神をあるは鎮座なり

十騎社



奉るるハ尤久一と云 此地上古ハ奥州への街道や、日本武を東  
夷征伐の時爰め、矢合せしあひ、曰跡なりとの  
矢口の地名も此事に  
ありて發るといふ

六郷の川を隔て、箱毛の地ハ矢向と云邑名あり  
題も其時の矢の向ひたる地故といふと云なり

古川薬師如来堂 古川村ハあり新田明神より東南の方二十丁と云

を隔つ醫王山世尊院 安養寺と号し新義の真言宗や、

高畑村の宝幢院ハ属を上古ハ東光坊と号せしとなり本堂の額醫

王山の三大字ハ黄檗高泉の筆なり

本堂 本尊薬師如来 五尺 左右弥陀释迦二尊ハ各五尺三寸脇檀十

二神將及ひ四天王の像も共ニ行基菩薩の作なり 往古當寺ハ存する  
所の銀杏樹あり

瑞光を現を依る夜木を  
以て像林とせしと云

銀杏樹 本堂の前左右ニ樹並立し諸人乳のあきもの祈る者ハ駿ありと云此靈

杉本靈泉 本堂の前右の方の椀の下ハあり眼疾を患ふ者ハ靈水を以て  
洗ふ其驗あり

五智堂 十五愛染の像もあり本堂の右ニ並ぶ



寺記云行基菩薩関東遊化の頃和銅三年庚戌此地に至るゆゑ  
今安置し置る所の本寺薬師佛并脇士弥陀釋迦の両如来及び十  
二神將四天王二王の像共々自造立せられし安置ありしは遙の後  
天平五年癸酉春三月 聖武帝の后王子少誕生の頃乳味盡とせ  
あゆり故に行基菩薩の奏より當寺の薬師佛に祈誓まりし  
其験を得ゆひ一頃銀杏樹二株を奉納なりしなり又同年の  
秋浄堂造立なりしゆ七堂伽藍の靈地となれり  
婦人乳の必きその至心は祈請あり然る遙の後此地の領主某諸宗責伏の宗  
中より附ハハわかれ其あるありあり  
派ゆく當寺の繁栄を深く如き堂塔破却しかきハ銀杏樹の根  
下は捨て風雨に浸さしむ 此罪業よかりて其子孫絶せ 其後永祿の頃住持栄傳十  
方は勸進し一宇を宮と本寺を移し置りしなり  
按武蔵國風土記殘篇に荏原郡満田郷満田寺に清宗法師薬師佛を安置  
せりとありしゆ今古川村大森蒲田等の辺其地は相應せしゆ梅を貢とせしゆ  
記しあり今古川村大森蒲田等の辺其地は相應せしゆ梅を貢とせしゆ  
蒲田郷六郷堤方及び稲毛庄木月郷今井を分給の地を領するゆゑ然れハ助五郎  
も此地の人と云はれ又同書に圓城寺所領の中は六郷内鑓田とありしゆ此所の記なり

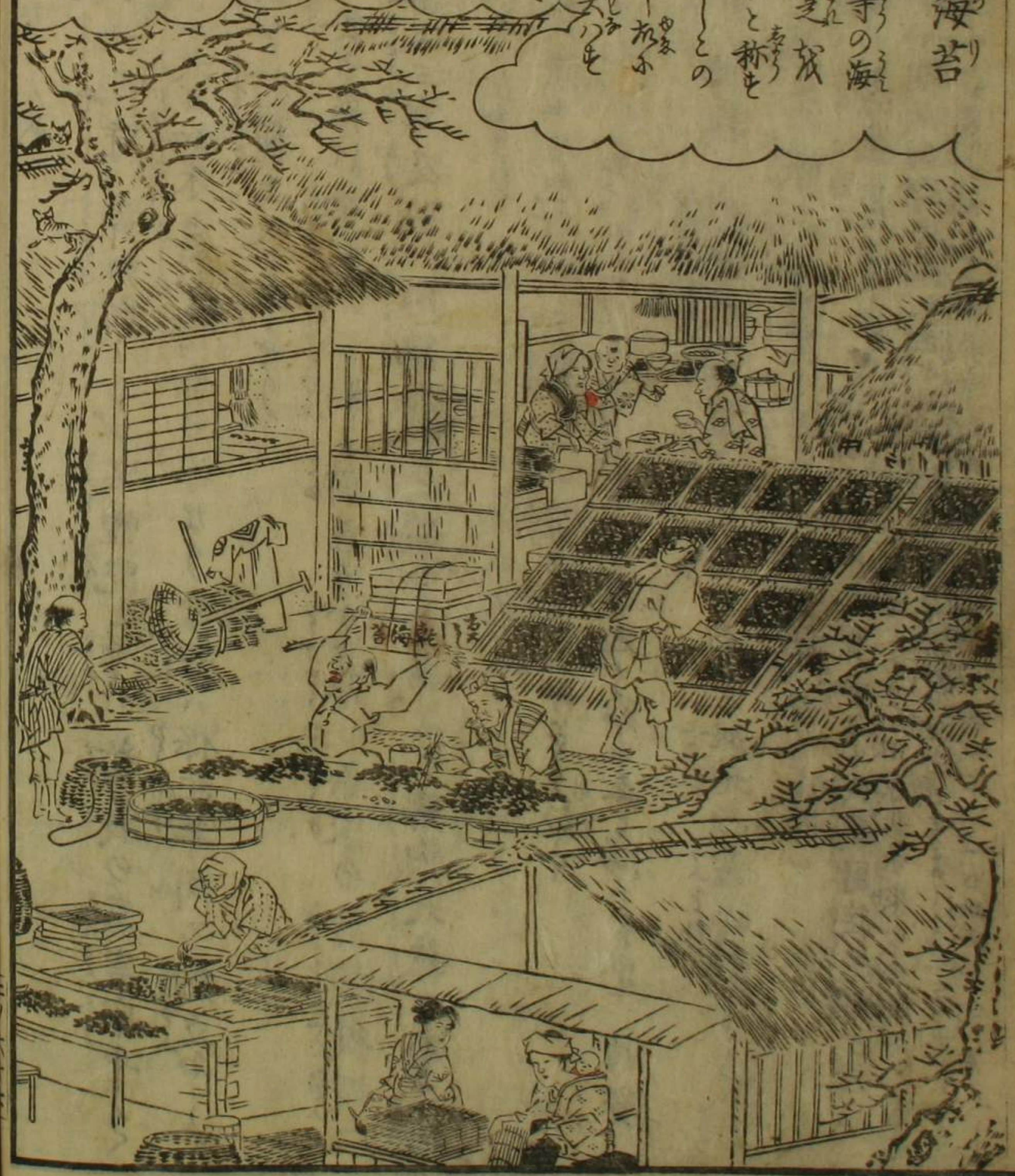
なごん歌

大綱山光明寺 高畑村にあり宝幢院と号し新義の真言宗なり  
本寺ハ大日如来惠心僧都の作なり當寺ハ保元年間創立なり  
関山を行観上人と号せり  
大森 鈴の森に南不入計村に隣り小田原北条家の所領役帳に  
渋谷又三郎及び六郷殿 此人 球考 所領とある中は六郷内大森とありハ則  
此地のゆかりなり  
太田持資平安記行 大森と云ふ森のうけふやそとく  
大森の末は下うけの海にさふあるゆゑと云はるなり 持資  
貴船明神社 大森村海道より右にあり此地の産土神なりて別  
當ハ真言宗大森寺と号し由来由詳なり  
蒲田梅 蒲田邑にあり 蒲田ハ和名類聚抄にも武蔵國荏原郡の中は加  
助五郎六郷堤方及び稲毛庄木月郷今井を分給の地を領するゆゑ然れハ助五郎  
も此地の人と云はれ又同書に圓城寺所領の中は六郷内鑓田とありしゆ此所の記なり

一年の間  
 田置と  
 合風味  
 変り故  
 高貴の  
 家の中  
 賞讃  
 諸国共  
 送るは  
 是と産  
 業と  
 者駿  
 く実小  
 江戸の  
 産なり



浅草海苔  
 大森品川等の海  
 小産せり是は  
 浅草海苔と称せ  
 るを往古かこの  
 海小産せられ  
 其旧称を失は  
 呼来まり  
 秋の時正  
 産泉茂  
 建春の時  
 正小止る  
 定規とを  
 寒中小採  
 絶品と





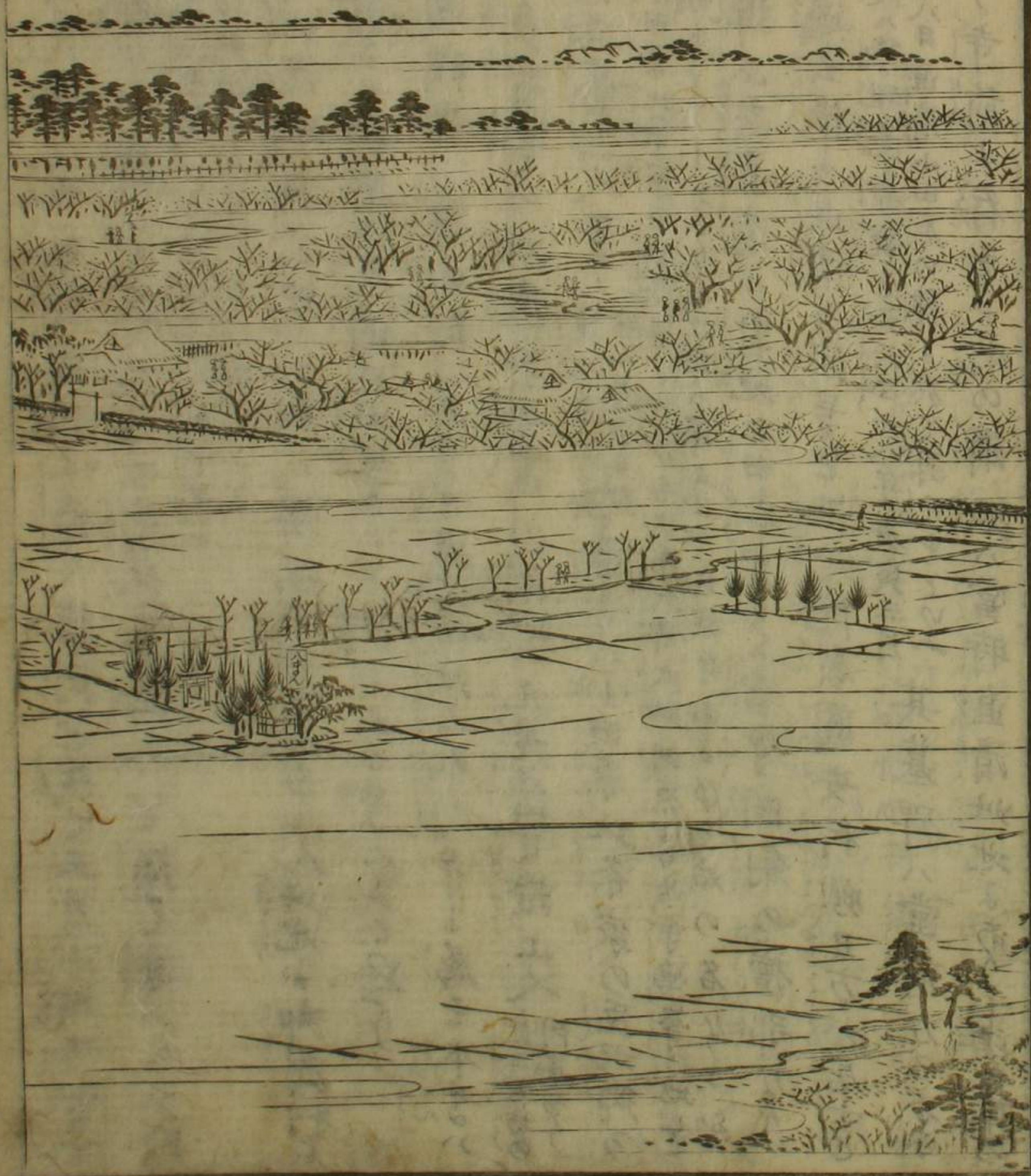


大森村の  
 名産  
 として  
 驚く家元  
 多し五彩  
 小満て種  
 の器物を  
 製す他  
 邦の人求  
 め得る  
 家土産の  
 細工



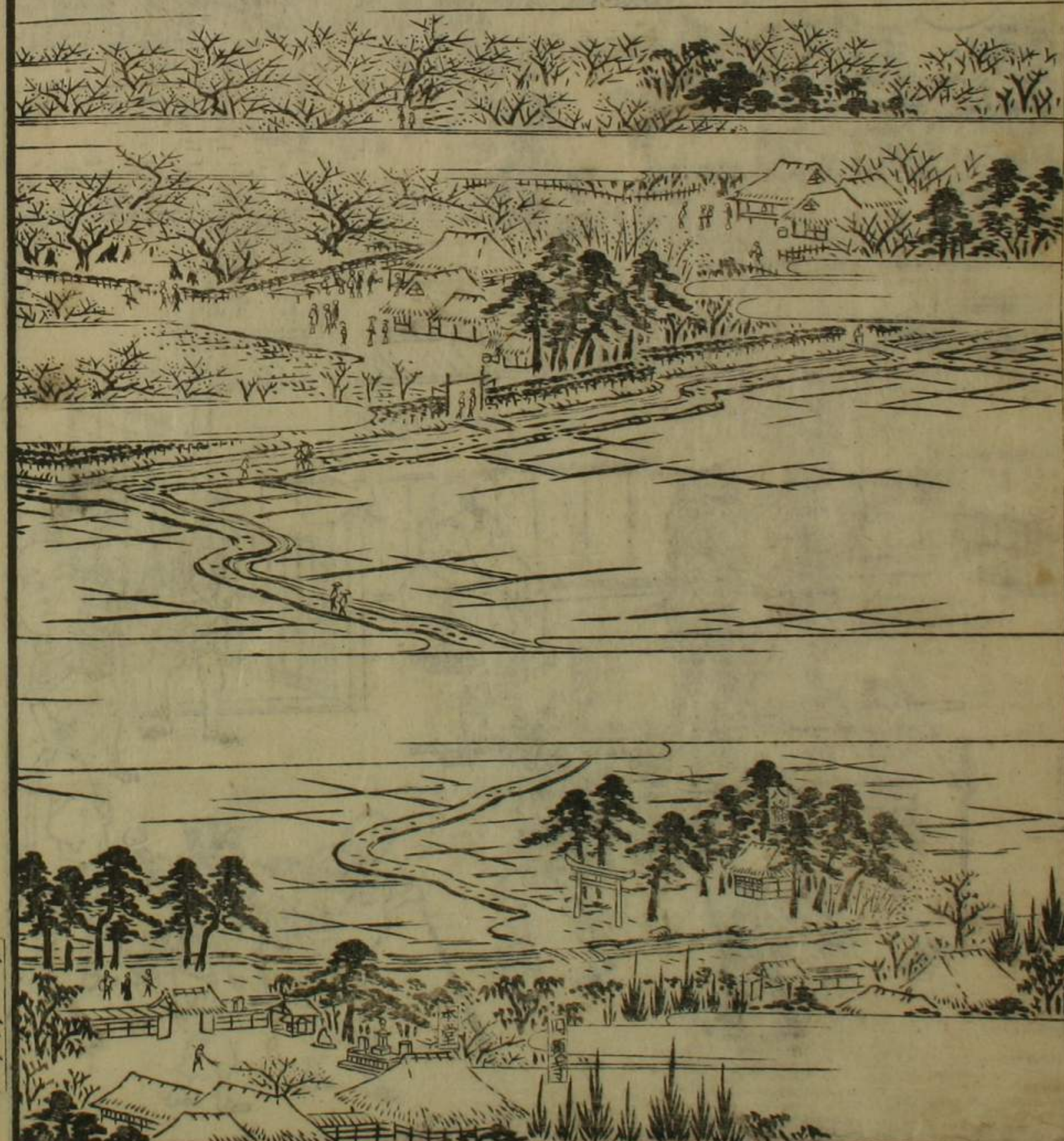


嵐雪 梅の花



梅干 見知 辰

浦田里梅園  
行方彈正宅跡



此地の民家ハ前庭後園共ニ悉ク梅樹を栽て五月の頃其實を採り都下ニ鬻ぐされハ二月の花盛中ニ幽香を探り遊人必ク

行方彈正忠明連宅地 六郷八幡塚の辺を云ある人此地ニ御園村と

性光山圓頓寺 蒲田村ニあり日蓮宗池上本門寺ニ属す本寺ハ

釋迦多寶等の木像を安置し潤山ハ九老僧日證上人 潤基

中興ハ日藝上人なり 寛永二十年癸未二月朔日 當寺ハ小田原北条家の臣六郷の

領主 小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を

行方彈正忠直清ク宅地の旧跡あり 當寺潤創の檀那なり

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と

稱す 父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月 其墓碑ハ堂前左の方小

存せり 寺前ニ存する所の溝堀ハ當時直清此地ニあり 項の構の

外堀を其儘ニ用ゐると云小田原記ニ永祿九年武田信玄小田原ハ

人数少き隙を窺ひ思ひよる方あり 小田原へ押寄るとある条

下ニ六郷ニ行方彈正居り 間己らあり きの近所なる八幡を要

害ニ構へ稻毛の田島 横田 駒林 定頼等

を引卒し橋を焼落し 甲州勢を通す 信玄ハ品川の宇多河石見寺

鈴木等を追散し 六郷の橋落れ 池上へかゝり 池上寺を追捕し 池

寺ハ本門寺 此寺の僧を案内者として 矢口の渡を舟中渡り 稻毛の

平間と 所へ渡り 稻毛の十六郷を追捕せしむ

蒲田八幡宮 同所道の傍ニあり 前ニ記せし 小田原記の文ニ行方

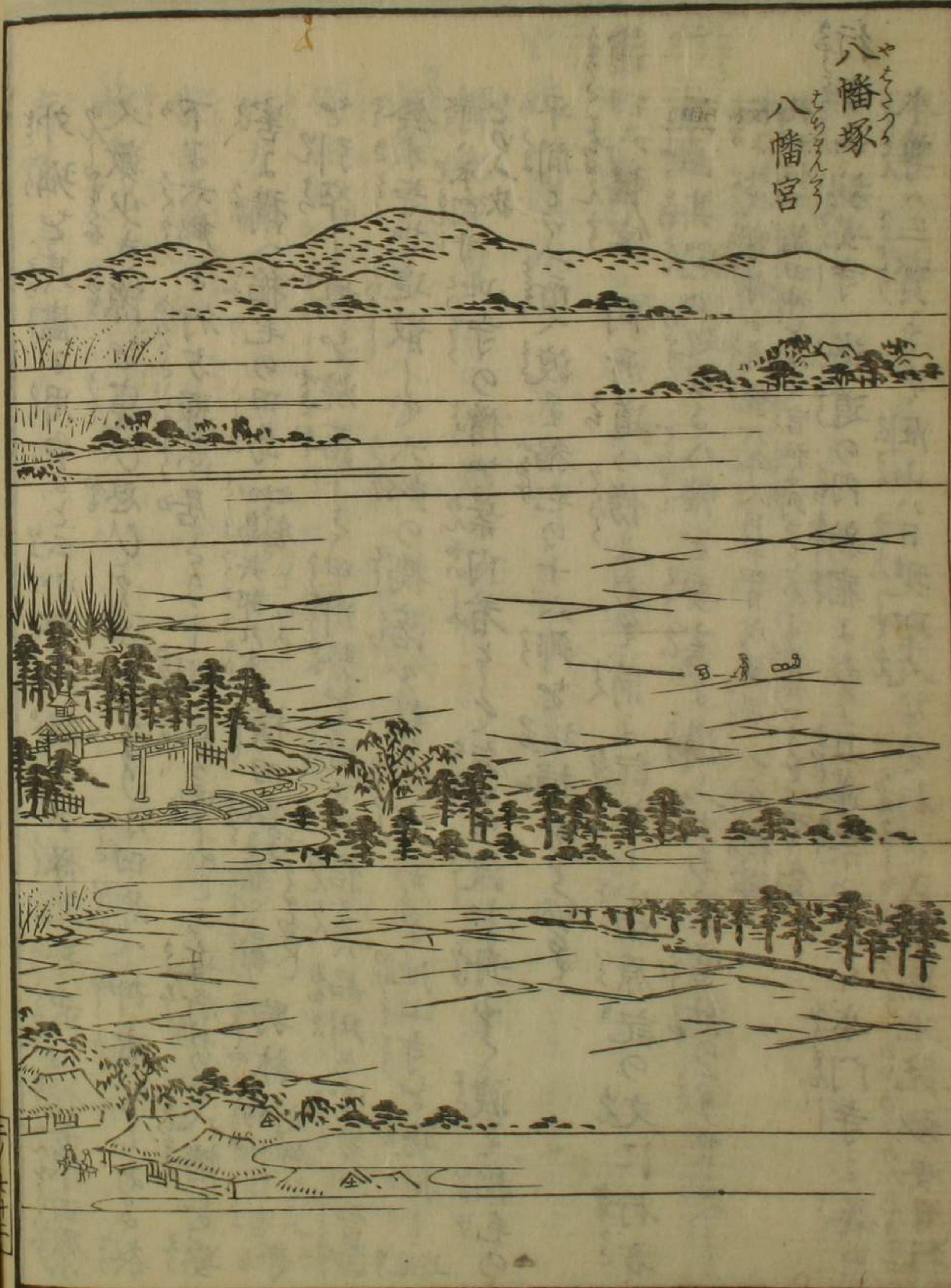
彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構ふとあるハ 當社のよりなる一

按ニ三代實録ニ貞觀六年八月十四日戊辰詔して武蔵國

後五郡下瀬田神と云官社ニ列せしむるも 當社のよりなる一

行方山妙安寺 海道の内新宿ニあり 日蓮宗中々本門寺ニ属す

本尊ハ三寶あり 潤山ハ日現聖人なる 行方氏室圓光院妙安日行



大塚の菩提所と云 天正十七年丑 十月晦日あり

朗羽山長照寺 獵師町あり日蓮宗なり當寺は豊太閤秀吉公比

守佛なりと稱し北辰奴見大菩薩を安屯

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守なり八幡塚村あり別當八真言宗小

安房國より大軍を卒し鎌倉へ入る項此所を旗を建軍勢の

著到を記しゆひ日跡ありと之を勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮を

勸請しあつとと祭禮ハ六月十五日中て神輿羽田より大師河原へ

移りたまふ當社ハ頼朝卿建立の時梶原奉行せりと記せし

梁牌ありといふ也 梶原景時なる馬込村万福寺の条下は平所の小

八幡塚 一塚あり右の方の樹木繁茂せり 旗立杉社地也

古家敷 大塚の畑とありとあり 按て行方禪正明連の家

旗竹は用ひられしものやく繁茂せしと云り

六郷渡 八幡塚の南あり此川ハ多摩川の下流中て八幡塚あり

河崎の驛への渡しあり昔ハ橋を架せり享保年間田中丘隅と

いふ人の工夫あり洪水の災を除んる橋を止め舟渡せしと云り

田中丘隅ハ俗稱休愚右衛門嘉古と稱し冠帯老人と号し水理を達を相州酒匂川

水と治めし此人の工夫なり今其河原ハ其事を記し碑あり又民間有要といふ

書を著し今上平間村の田中山妙光寺と東海道名所記ハ此橋の長さ百二

十間とあり 東路の四大橋といふ江州瀬田参州大橋同吉田及此六郷の橋あり

癸未記 六郷橋 癸未記 六郷橋 癸未記 六郷橋 癸未記 六郷橋

注云 俗説 畠山重忠嘗居于此雖不芳于旧記然重

忠者武州甲族而屢往來鎌倉則不可無其理故首

河崎及此云云 郷里俗稱重忠居此村重忠武州七黨

長攻野戰報君恩附勇功士往事悠々遺

躑躅去江城五里許喧異域來朝走與奔可笑

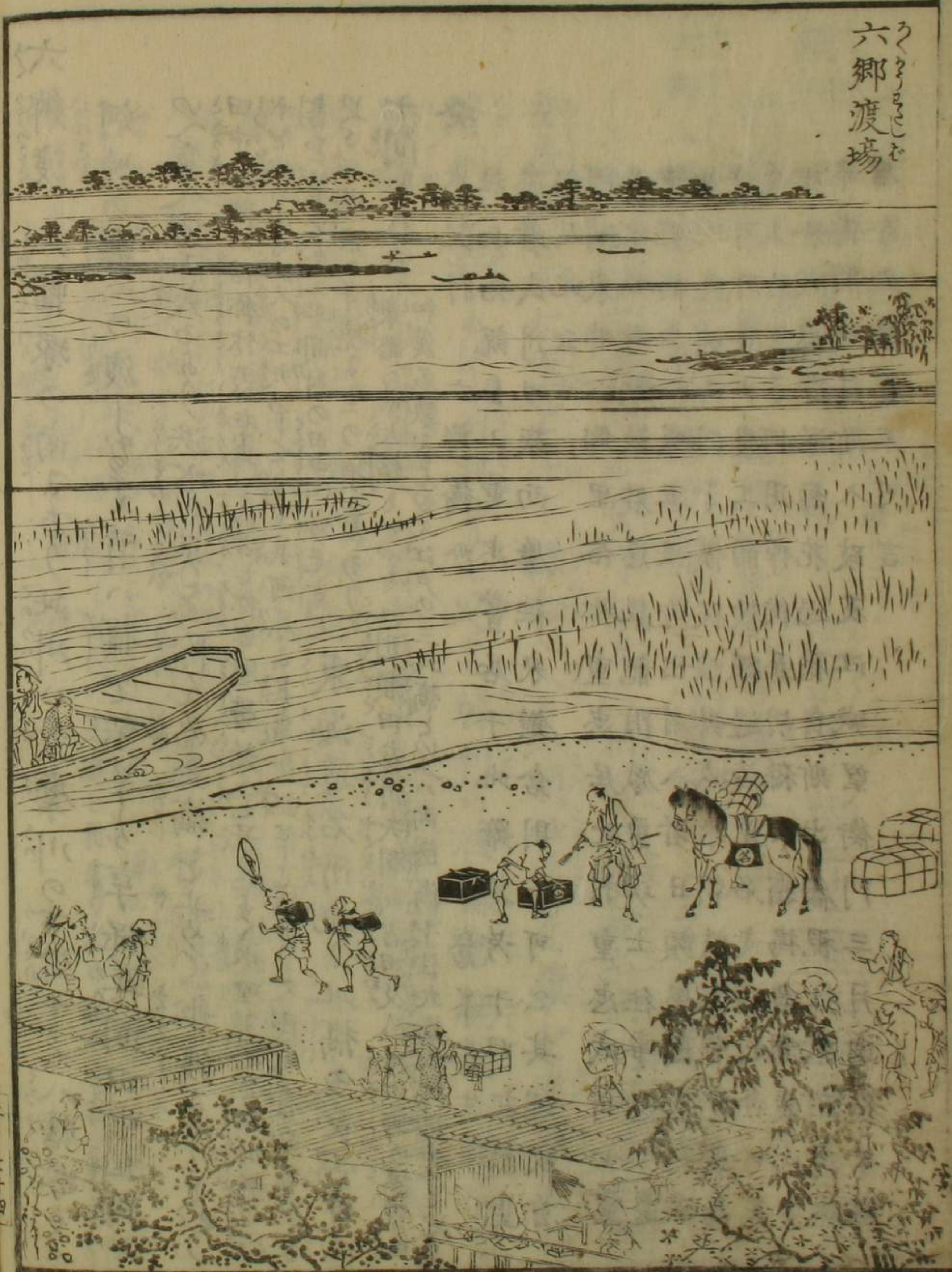
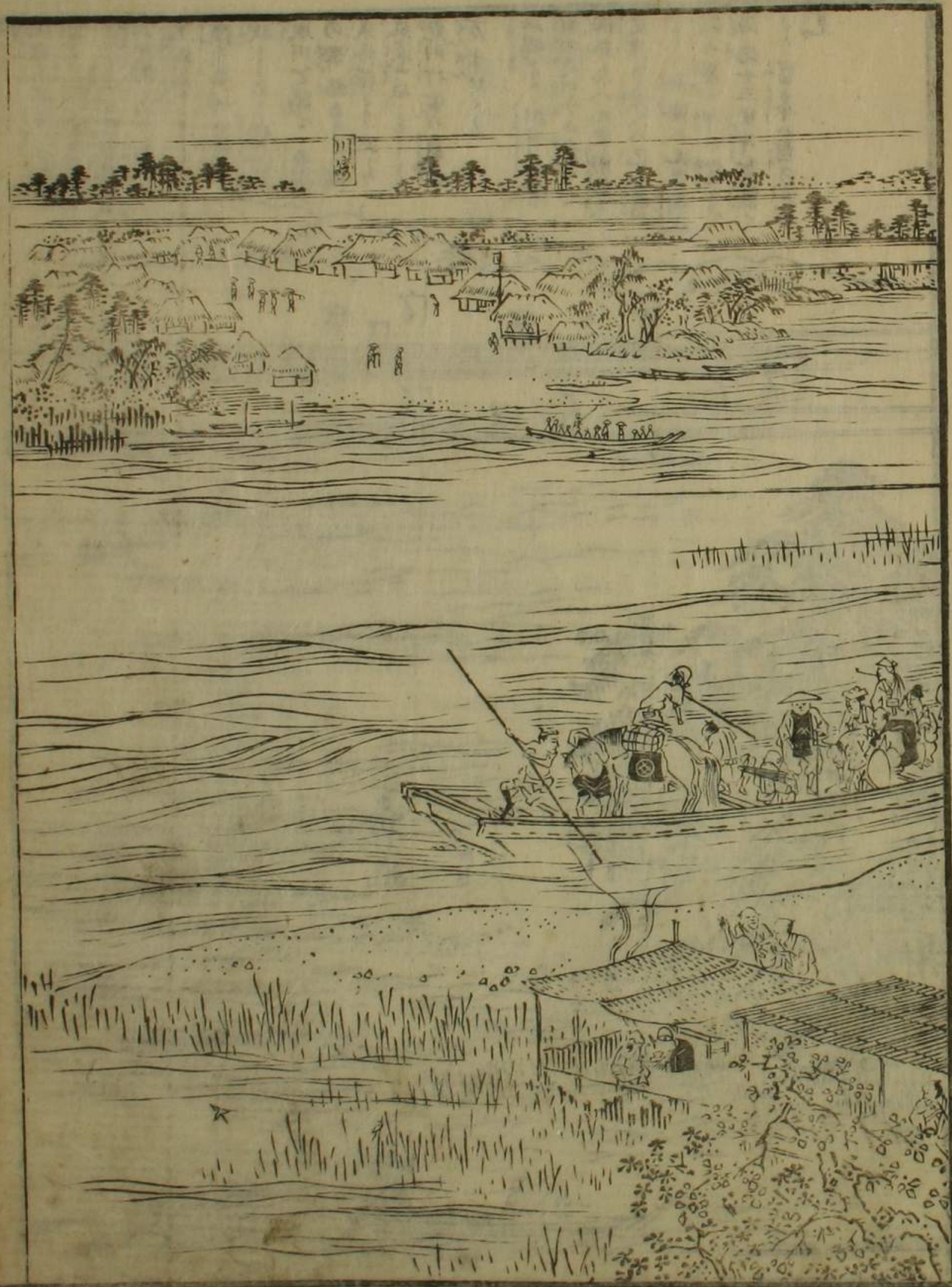
會同處典馬劍牙僕從過胡玄霜鴉盡朝裴氏丁

呼可汗尊士農工商幾經皆是名朝走與奔裴氏丁

尾生約女許何用禪徒弄胡玄霜鴉盡朝裴氏丁

早吟成憶許渾菊花後自斯出顧視江城殆消魂

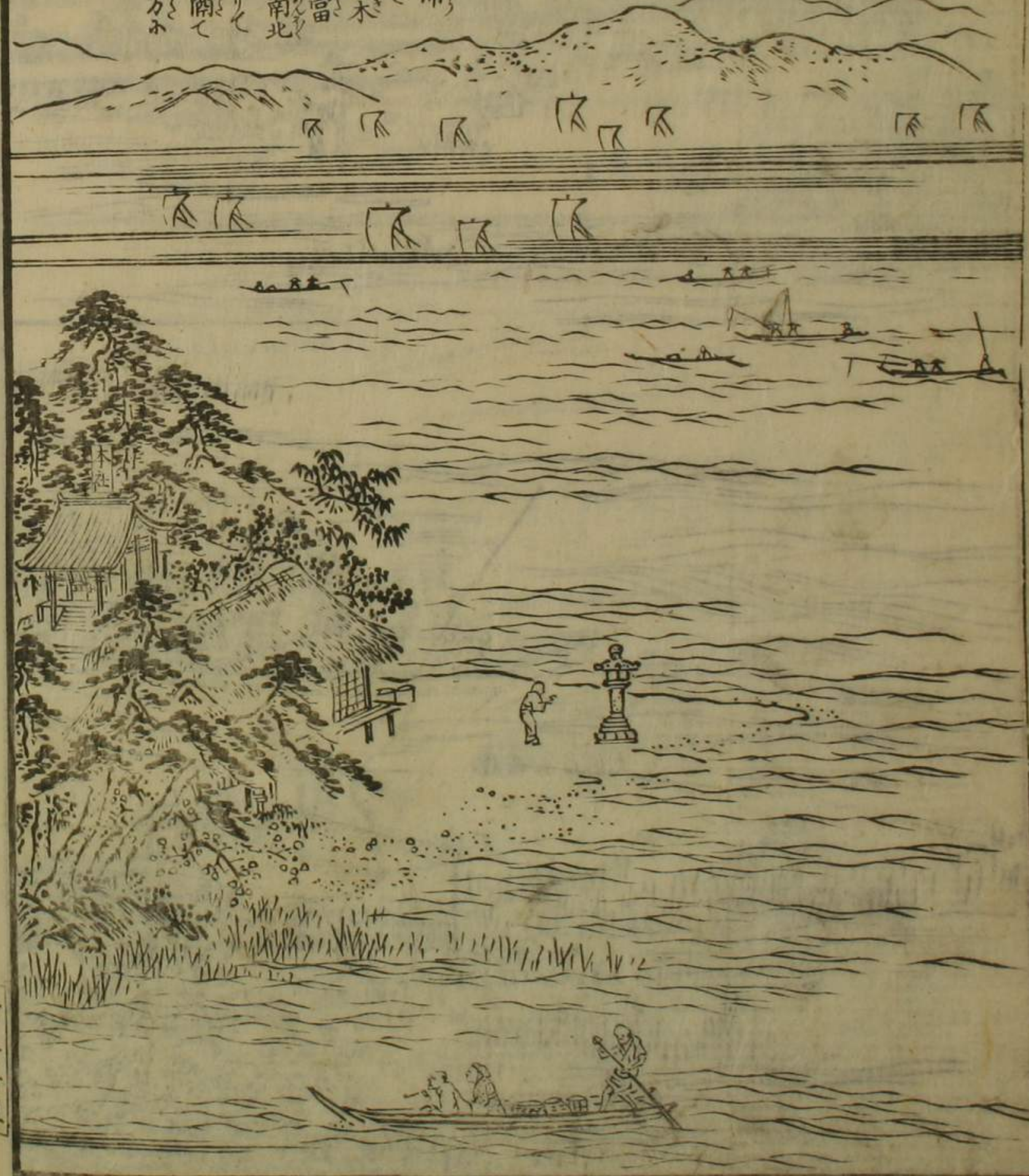
府今開時自不可言及江城望衡門三月遠征幸歸



羽田  
辨財天社



此地の眺望最秀美なり東へ滄海漫漫として旭日の房終の山小掛あり南に玉川混とて清流の富峰の雪水映りあり西へ海老取川を隔て東海の驛路あり往來の便路なり北に筑波山城とて飛雨行雲の氣象万十なり





要  
 鳴辨財天社 羽田村の南の洲崎よあり故よ羽田辨財天とも称せり  
此羽田の浦を扇ヶ濱と号す故此地を要島と号す 別當ハ真言宗中々金生山龍王蜜院と号し  
 辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰中々弘法大師の  
 作なりとの事此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家ニ傳へる尊  
 信ありし當社海誓法印の時靈夢ニ感する所ありと以て宝永八年  
 辛卯四月此本を遷し此地ニ遷しなりと成り  
田川大竜寺開山香國禪師正徳三年ノ誌也所の社記と有馬家の

縁起異同 又當社は如意寶珠一顆を安置せし  
天銀の類は其寶  
 相傳ふ武州日原山ハ弘法大師開創の地なり山中ニ大日  
 靈水と稱するあり水中一顆の宝珠を存せ然る往古此宝珠玉  
 川の流るるをひ羽田の辺に止る水中昼夜靈光を現は依土人  
 りてんて烟を下し是を得る後社を建て崇敬を當社は是なりと  
畧縁起云云 康治二年の春當社の南の大河に烟引して一顆の  
 宝珠を故より故より玉川と名つけ玉川舟が天女と稱しまた  
 社殿を経営するとも屢風波の災はからるる永く保るあり  
 ハとて別當海誓阿闍梨法華經全部の文字を一字一石小  
 書寫し此海底に沈めて島を築き宝殿を建立せその感應  
 あらんと夫より己降青松鬱蒼とて繁茂し庭上苔む竟不  
 風波の難を免るを得たりと成り

江戸名所圖會天璇之卷

Handwritten text in a rectangular frame, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is written in a cursive style and is mostly illegible due to fading and bleed-through. A small mark resembling a checkmark or a hook is visible at the top center of the page.

甲  
冊  
三  
ノ  
七  
七  
七

